
魔法少女リリカルなのは～3人の転生者、平凡だ～

ACT 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜3人の転生者、平凡だ〜

【Nコード】

N6782M

【作者名】

ACT2

【あらすじ】

気付いたら暗闇に居た・・・いや、生まれて始めてみた景色が闇だった

転生？というより飛ばされて来たのはリリカルなのはの世界・・・取り合えず原作は他の奴に任せた。俺はのんびり寝る・・・ZZZZ

転生（前書き）

不甲斐無い！！

転生

此処何処だ……？真っ暗だ」

「起きたか、俺……」

「は？……うお！？俺？」

俺の目の前に俺と顔がそっくりな奴が目の前に居る

「鏡？」

「鏡じゃない……」

「うお……で？此処何処？」

「俺たちの死後の世界……まあ、いわゆる精神世界？」

「俺“達”？」

「そう、俺“達”」

何だかな……

「ま、そうは言っても俺とお前だけだな」

あ、こいつ俺だわ……と此方も思った

「で？如何するんだ？」

「お前を転生する……好きな願いも叶えてやるぜ？」

「うお、何そのテンプレ……」

「俺にとっては最高に……」「最悪」だろ？」

「拒否権を「無いぞ？」……orz」

もう一人の俺が近づいてきて、俺の肩に手を置くそして

「諦める……」

「は……いいぜ、転生してやるよ!~!」

「じゃ、まず願いは？」

「幾つでも良いの？」

「ああ、何せ他人じゃなくて俺だからな」

それもそうか……じゃあ……安全の為に最強にしよう

「一つ目、闇を俺の創造通りに操れるようにしてくれ」

「OK」

「二つ目、眼に関する能力全てをくれアニメ、漫画、ゲーム全部な」

「ほい、ほい」

「三つ目、不老不死」

「kk」

「四つ目、キープレードくれ……もちろん二刀流な？ロクサスが使ってる奴の」

「おう、良いなそれ……」

「ふっ五つ目、【消す程度の能力】をくれ」

「ん？……ああ、すげえチートだな……」

「六つ目、魔力、気の無限化」

「はいはい」

「でラスト、鍛えれば鍛えるほど俺の身体能力が上がるようにしてくれ」

「ほい、完了……」

ふ、すげえチートにした感じだが……まあいいや……ク
ククク

「じゃ、行く世界はリリカルなのはだから……がんばれよ!!」

「おう!!」

「平凡、平和それが俺のポリシー!!」

そして俺は転移された

転生（後書き）

不甲斐無い！！

俺の親（前書き）

本当にすみません・・・

俺の親

「おう……親がいねえ」

転生一日目で親に捨てられた賢一です……何故だorz

「ん？紙……？」

「すまん、転生させる親を間違えた……だが俺の呪いとも言える災難と死亡フラグは消しといたから安心しろ……」

俺からの失敗の手紙とナイスな報告が書いてあった……まあプ
ラマイゼロだな

「まあ……いいか、じゃ修行を始めますかね……っともう
一通？」

「如何やらそこにはお前以外に転生者が二人いるぞ……そい
つらに原作任しちまえww」

ちよっおま……ナイスな考えだ……

「とりあえず【闇よ】うっしハートレス完成……」

ま、こいつ等で修行するかな？……って俺生まれたばかり
だったorz

「あ、能力使えばいいじゃん【常識を消す】よし……立てた」

じゃあ〜とりあえず十年位修行するかな……

~~~~5年後~~~~

「おう、俺は化け物か……!?!?」

能力を完璧に扱えるように成りました……まあ【不可能を消  
したんだけどね】

「じゃあ体鍛えるかな?」

「君はこんな山の奥で何をしているんだい?」

「え・・・・・・・・・・？」

そして俺の新しい父さんになる人と出会った・・・・・・・・

「実は・・・・・・・・（説明）」

「ほう実に興味深いね・・・・・・・・どうだい？君、私に付いて来るかい？」

「え？・・・・・・・・良いんですか？」

「ああ、気味さえ良ければね・・・・・・・・」

人肌が恋しかった俺には・・・・・・・・嬉しい事この上なかった・・・・・・・・

「はい！！付いていきます！！！」

「ふふふ、これからよろしく・・・・・・・・私はジェイルスカリエッティ、研究者さ」

おう・・・・・・・・まさかのラスボスさんの身内になりました・・・・・・・・あれ？災難は無いんじゃないの？

「あの〜家は………?」

「ん? 別世界さ」

モノホンですね……

「ドクターお帰りなさいませ……その子は?」

「ん? 私の子供になった子だよ」

「風間賢一です、よろしくお願いします」

「はい、私はウーノです。賢一」

まあ、暖かいから良いか……良いよね?

「お、お父さん……何処に行くの?」

「……」

「お父さん?」

「ん? いや、お父さんか……うん」

ブツブツ言い出すスカリエッティ……あれ? 嫌だったか

な？

「で、アレから2年……父さんが親バカに為った……あれえ〜？」

俺がお父さんつと言い出したときから様子がおかしくなっていた……まあ良いけど

「ケン、君は小学校つと言うものに行きたいかい？」

唐突に父さんからその言葉がかけられた

「え？」

「ああ、行きたくないなら、行かなくて良いんだ、ずっと私のそばに居てくれて構わない……」

この時俺は……うざいっと思ってしまった。だから……

「はい！！行きたいです！！」

「ああ……そうかい」

快く行くと言う選択をした……いや、してしまった

「それでじゃ、ケンには私立聖祥大附属小学校に通ってもらおう」

「はい!……?」

魔王様とのエンカウント……だぜ?



俺の親（後書き）

最新

ステータス(前書き)

やっとなね？

## ステータス

風間賢一

筋力 B +

魔力 - (能力によってゼロ)

耐久 B

幸運 B

敏捷 A

能力

・闇・・・武器やハートレス、移動いろいろな事が出来る

・魔眼・・・アニメ、ゲーム、漫画で出る眼に関する能力全て  
が使える

・不老不死・・・20歳から不老

・キープレード・・・説明はむずい

・消す程度の能力・・・【くを消す】と能力を発動するとそれが消える

???

筋力C

魔力EX

耐久C+

幸運A

敏捷C

能力

・王の財宝  
ゲイト・オラ・バビロン

・投影

・固有結界“無限の剣製”  
（アンリミテッド・ブレイド・ワークス）

???

これは読者に決めてもらおうかな？無かった自分で



ステータス（後書き）

とりま此処まで

入学式〜お前犯罪者だろ！〜

今日は俺が学校に入学する日だ……もちろん、金髪、紫、茶髪ツインテールも居たさ、そーいや茶髪と仲よさげに話してた男子が居たな、転生者！？キタコレ

「俺は遠藤達也、よろしく」

「ああ、俺は風間賢……………」

友達になりました……………何故だ……………!?アレ?隣の席そしたら友達!?主人公補正か!? 違います賢一がドジなだけです

カシャカシャッ

「なあ?アレってお前の親?」

「違う……………ぜ?」

父さ……………ん!?あんな犯罪者!!こんなとこ来ちゃ駄目……………!?

「流石、私の息子……何着ても似合っね」

「やっぱり、お前のお」言っな「……あ、ああ」

後ろで写真を取りまくる父さん、そして近くには姉さん達……  
・何で居るのさ!?

「あれ？」

「如何した？」

「いや、お前の親って何処かで……いや気のせいだと思う」

はい、転生者……!!この子転生者……!!逃げて……!!  
父さん達……!?

「達也君!同じクラスだね!!」

「ああ、なのは此れからもよろしくな？」

「うん／＼／」

はい、フラグ立ってます……フラグメーカーです……  
天然物です!!



「ヒュウ ヒュウ お似合いだね」

「なっ！？／＼／＼そんなじゃねーよ！！」

「／＼／」

茶化してみる、なのはが恥ずかしそうにそして満更でも無さそうにする……完璧にフラグ立ってます

「じゃあな！！ケン」

「またねケン君！！」

「ああ……orz」

何普通に友達してんだ俺——————！！

「もういいや……原作には関わらないから良いや」

うん、あと1人いる転生者もその内探しと………絶対に原作には関わらない！！



入学式、お前犯罪者だろ！ー、（後書き）

うんコレで良いや平日も本編進めようかな？

親友へ普通の親友が良かったorz（前書き）

最新へ

親友く普通の親友が良かったorzく

「じゃあ、父さん行ってくる!!」

「ああ、気を付けて行くんだよ？」

「分かってるよ!!」

俺は3年生になった・・・え？原作？喧嘩？ああ、転生者もとい、達也もとい、親友がやってくれてますよ・・・俺？そりゃW平凡に楽しく親友を弄ってますww

「たつくおっはよー!!」

「お前、朝から元気だよな・・・」

「は、何を言っている朝から美少女と登校が出来るんだぜ？元気になるに決まってるだろ？」

何か俺よくある、主人公を後押しする悪友的、性格に為ってます・・・自分でやってるんだよ？そっちの方が弄りがいがあるから・・・フフフフ、あ！眼鏡（丸めがね）も装備してるから、完璧だよ  
ね？

「そうか？」

「はっフラグ野郎が」

「はあ？」

今思ったんだけどさwコレって小学生が話す事じゃないよねw

「達也君、ケン君おはよう〜!!」

「おう、なのは」

「おっはよう〜なのはちゃん!」

ととととこ、走って此方までやって来るのは……ああ、こけるよ?あ、こけた

「おい、おい大丈夫かなのは?ほら」

「ふえ……うん／＼／」

手を差し出す達也、そしてそれを赤くなりながら握るのは……  
・・なんだ!この甘い空間は!!

「ああ、もう桃色空間作らなくて良いから先行こつぜ？」

「素に戻ったな……って別にそんなつもりはねえ!!！」

「ふえ／＼／」

おっと、思わず……悪友キャラでバカっぽいを意識しな  
きな

「なのはと達也、おはよう後ケンも」

「俺はついだよ!!！」

「なのはちゃんと達也君おはよう、後ケン君も」

「すずかちゃんまで!？」

いじけるよ？俺教室の隅で学校終るまでブツブツ言い続けるよ？

「おはようすずか、アリサ」

「あ、スルーですね？分かります」

何だかんだあって授業です……寝てました。

「zzzz……。」

バンツ

「いでっ!?!」

「ケンこの問題答えてみる」

あ、チヨーク当てた事に謝罪はなしですか……そうですね

「27です」

「違う……26だ」

「おしい!」

パチンッと指を鳴らして苦やしそつにするにする

「はあくもう良い座れ」

「はい」

適当に授業は過ぎました……え?体育?見学だけ?流石転生者、体はそれなりに鍛えてた



「達也君、一緒にお昼食べようよ?」

「ん?分かった、ケンお前も如何だ?」

「ん?あああういゝzzz...。いくいく...」

弁当を持ってフラフラしながら達也達の後を追う...・眠いッス

「うまい...」

モグモグ

小動物のようにモグモグと味わいながら食べる

「ねえ、達也...ケン如何したの?」

「ああ、頭が覚醒してないんだろ?」

「小動物モードって呼んでるの。私達は」

「小動物モード?」

「うん。眼鏡外したら小動物に見えるの」

おう？何か話してる？・・・あ、飯が美味い・・・

「へえ〜見てみたいわね」

じりじり、とケンの眼鏡を取ろうと近づくアリサ

「ご馳走様・・・じゃっ先に戻ってるわ・・・」

「ちっ逃した」

うあく頭がはたらかねえ〜・・・ZZZ・・・。

「あれ？皆さん？何処ですかー？？」

気付いたら夕方になっていた・・・・・・ほってくなんて、  
ひびくー！

親友へ普通の親友が良かったorz（後書き）

最新へ

父さんの手伝い〜あゝ毒されてるな〜

「ケン、トーレ達の修行相手をしてくれないかい？」

「俺、そんなに強くないよ……？」

「戦ってみなきゃ分からないよ」

はあ〜……これじゃあ何のために魔力消してるのかわからねえ・  
・

「分かったよ……」

「フッフ、流石我が息子、物分りが良い」

関係ねえよ……

「って父さん！！3対1なんて聞いてない！！」

「ケン悪いね……君の力を試すためだ」

「くう〜！！覚えてるよ！！」

俺は目の前にいる3人を見据える……トーレ、チンクそして  
何時帰って着たのかドウエ

「悪いな、ケン」

「別に良いですよ……はあ」

「フッフ、ケンちゃんの見せてもらっわ」

「ケン兄さん、すみません」

俺は両手にキープレードを呼び出す

「」「！?」「」

「それじゃ、行くよ?」

まず狙うはスピード重視のトーレ姉さん……駆逐するよ

「はああああ!」

ガンッ

「くっ!」

「両腕で俺の攻撃を防がれるその隙に後方からチンクの攻撃が襲い掛かる」

「ちっ！！」

キブレードを飛ばし攻撃を防ぎもつーつのキブレードでトーレを更に追い込む

ガガッガ

「くっはああああ！！」

ドガッ

足蹴りが俺の腹に直撃する……

「がはっ！？」

「驚いた、まさか此処まで強いとわ……」

「トーレ、まだ見たいよ」

「！？」

眼を発動する……発動するのは車輪眼

「本気で行くよ……」

「眼が……」

再び両手にキープレードを呼び出す

「はああああ!!」

攻撃を仕掛ける右からチンクの遠距離攻撃、前からトーレの蹴り、左からドゥーエの遠距離攻撃それをすべて予測して……かわす

「何!？」

「まず一人!!」

叩き斬ろうとするがトーレは焦らずにそれを交わし避け俺の腹に更に一撃……こんなもんで良いかな?

「やっぱり強いや……」

やべ・・・当て所が悪かった・・・そのまま俺は意識を落とした

く父さん（スカ）く

「流石、私の息子だ！！」

なんて事を言ってたそうなの・・・



父さんの手伝い〜ああ毒されてるな〜（後書き）

もう一度言つが俺“は”原作に関わる気はない!! (前書き)

暇になってきた・・・だから最新

もう一度言うが俺“は”原作に関わる気はない！！

「リアル執事だ……」

「本当だな……」

「何呆然としてんの？あんた達」

俺達の目の前にはリムジンは別にいい……執事だ、執事。バ  
トラーだぜ……？

「今日、すずかの家に集合だからね？分かった？」

「ああ……」

「いる所には居るんだな……執事」

「だな……」

感動が俺達の中で10分間流れ続けた……感激だぜ

「ただいま」

「おかえり、ケン学校は問題ないかね？」

「うん、大丈夫」

そうか、そうかと嬉しそうに頷く父さん……駄目親になっ  
て行く……

「今日、友達の家行って来るね」

「分かったよ、6時には帰ってくるようにね」

分かったつと告げて俺はさすがの家へと向かった……とは言  
ったけど転移で一瞬だけどね

「でかい……」

「だな……」

何時の間にか横にいる達也……気配を消して近づくな……

「達也、お前がチャイム鳴らせよ」

「いや、お前が」

「いやいやお前」

「いやいやいや」

「いやいやいやいや」

譲り合いを続けていると屋敷？の扉が開く、そこにはメイドが・

「執事の次はメイドか……」

「だな……」

「すずかお嬢様がお待ちです」

そのまま屋敷に行くメイドさん……付いて来いって事？

「行くか……」

「そうだな……」

そして連れて来られた場所は……

「猫？」

「猫だな・・・」

多量の猫猫猫・・・此処まで行くと逆に気持ちわ・・・あ  
えて言わないでござい

「あゝ達也君とケン君やつと来たの!!」

「すまんすまん」

達也が笑顔で謝罪してなのは頭を撫でる・・・見てるこつ  
ちが恥ずかしいな

「にやにや／＼／」

猫が一匹増えました・・・っ!?何だこの寒気は!?!?  
・・・鬼が2匹増えました

「達也、俺ちよつと猫と戯れてくる」

「ん?ああ」

「死ぬなよ」

「え?何だつて?」

俺はその場から離れ猫と遊ぶ……決して逃げたのではない

「ほれ猫ジャラシ、ホレホレホレ」

ブンブン

《にゃあ》

あゝ癒される……後鳥肌がパネエ……主に背中

「おっ……え〜とオコジヨ？イタチ？何だけ？」

俺の傍になのは達が助けたという小動物がいる……何かは忘れた淫獣だっけ？

「ん？あ、おい！！」

何かを見つけたのか森の中に行ってしまう……ジュエル  
シード？だっけ

「あ！！私ちよっと探してくるね！」

「俺も探そうか？」

「え！？良いよ、すぐ見つかると思うし」

悪戯で俺も行く発言をした……まあOK貰ったら少しあせるけど

「そうか、まあ遅かったら達也が探しに行ってくれろさ」

「俺かよ！！」

「俺はもう帰らなきゃいかねえの！！しょうがねえだろ」

「は！？まだ来て2時間も経ってねえじゃん」

「はははは、俺は忙しいのだ少年」

「お前も少年だろうが！！」

俺はそのまま背中を向け家へ帰る……アリサとすずかと一緒にいても何をすればいいか分からなかっただけですけどね

「原作、始まったな……まっ俺には関係ねえけど」





喧嘩ですか？喧嘩ですよ！喧嘩（前書き）

ふい  
）

喧嘩ですか？喧嘩ですよ！喧嘩

「え、何？このピリピリした空気」

「遅かったな……？」

「ああ、弁当探しててさ……で何コレ？」

達也曰く、なのはが悩み事をして相談されなかった事で喧嘩

達也曰く、とりあえずフォローは入れておいたそうだ……

「喧嘩ね……珍しいな」

モグモグ

「この空気で普通に飯が食えるお前が羨ましいよ……」

へへへへ、褒められた……しかし俺達って小学生？……

あ、コレは触れちゃいけない？分かった

「達也、きちんとフォロー入れて置けよ……？」

「は、何で俺!？」

「正直に言うけど俺はお前以外とそんなに仲はよくねえ・・・OK  
?」

「確かに俺以外と話してる所を見た事がねえ・・・」

そりゃ、原作何かに関わらないためだしね〜原作ブレイク?そんなのコイツともう一人の転生者がやる事、俺はのんびり生活が出来ればそれでいい

「じゃあな!頑張れよ!」

「あ、おい!」

「転移で家に帰ってきた俺・・・そして

「やあケン、お帰り?今日は実に面白いものを見つけたよ?」

「ん?面白いもの?」

「嫌な予感がする・・・」

「君のクラスに高町なのはと遠藤達也って名前の子がいるね?」

「え、うんー応友達……」

ほら来た……あゝすんげえ嫌な予感

「この二人は凄いや？女の子の方は9歳にして並外れた魔力の持ち主だ」

「へえ……達也のほうは？」

「男の子はアレはバグだね……魔力値は測定不能、そして剣を作り出すレアスキル」

なるほど……投影かって事は固有結界も持ってるのか？後は考えるとして王の財宝か……

「そりゃバグだね……」

「だろ？ケンのキープレードだったかな？それと同じ位謎だよ」

「あいつの技の方が謎だって……説明は向こうの方がし易いけど」

はあゝそれにしても投影か……まあ勝てない事はないか……

「父さん、少し学校を休むよ」

「ん？何故だい？」

「少なからず、達也と戦うかもしれないんだろ？そのための修行さ・  
・・・」

「ケンやはり物分りが良いね・・・」

・  
・  
能力が使えこなせても体が付いて行かなきゃ意味がないからね・

「無人の惑星で修行してるから、用事があるときは呼んでね？」

「ああ、分かったよ」

はあく原作には関わらない、だけど最後は関わるんだろうな・  
・  
・なんせラスボスの息子だし



喧嘩ですか？喧嘩ですよ！喧嘩（後書き）

次は転入生・・・STSまでは賢一は原作には関わりません・・・  
たぶん



久々に学校に行ったら知らない金髪が増えてた(前書き)

しお〜

久々に学校に行ったら知らない金髪が増えてた

「皆の者!! 私に帰って来た!!」

「」「」「」「」「」「」

「え? 何この空気・・・俺なんかした?」

皆が俺のほうを無言で見てる・・・あり?

「金髪が増えとる!?!」

「誰が金髪よ!!」

「おう、そんなに怒らなくても・・・っでそちらの金髪は? 天然ジゴロさん」

「ん? 誰だ? 天然ジゴロって」

皆が達也をジッと見る・・・お前しかいねえよアホ

「え? 俺?」

「で？誰ですかこの金髪ツ子“達”は？」

「ん？ああフェイトとアリシアだ……」

「ふ、フェイト・テストロッサです」

「アリシア・テストロッサです……！」

まさか、アリシアを蘇生したのか……てことは王の財宝も使えるって事か……

「俺は風間賢一……！少し旅に出た……ああ」

「旅って風邪で休んでただけだろ……」

「ふ、甘いな……三途の川つと言う場所に行ったのさ（キラ  
ン）」

「死にかけてた!？」

「冗談を言いながら楽しく会話をする……次は夜天の書ですか……  
……そっぴやもう一人の転生者は八神家にいるのかな？」

「にしても……ハーレムだな」

「は？誰が？」

「自覚がないなら別に良い」

「う、羨ましくなんか無い！！本当だぜ！！マジだぜ！！本気だぜ！！！！」

「時々、お前の言ってる意味がわからねえ……」

「……俺はお前の存在がわからねえよ……」

「久々の学校もすぐに終わり今は帰宅……って今思えばフェイトが来たって事はもう始まっている？」

「まあ、家に帰ってから考えよ……」

「家に帰ると丁度父さんに呼ばれた……はあ、何だよ考える事があるのに」

「父さん、何用事って」

「ん？来たね、まずこの映像を見てくれないかね」

そして、俺の目の前に開かれる達也が男と戦う映像そしてヴォール

ケンリッター

「これが如何したの？」

「この子達の監視と共に管理局へ侵入してくれないかね？」

「は……？マジで？」

「ああ、本気だ」

「……はあ、仕方ない父さ  
ん頼みだし  
って事は原作介入しろってことか……はあ、仕方ない父さ  
んの頼みだし」

「分かったよ……【魔力を消すと言った能力発言を消す】」

自分の魔力が戻ってくる……

「やはり、魔力持ちだったね？」

「やっぱりばれてた？」

「何せ息子の事だからね」

さて、何処で介入しようか……

「そついや、父さん」

「なんだい？」

「今の状況は如何なってるの？」

「ああ、闇の書の主が入院そして今日この子達がエンカウトする日だ」

へえ〜って事はもうラスボス……って！？ラスボス！？

「早くそれ言えよ！！行って来る！！」

「気を付けて行くんだよ〜？」

「わかってるー！！」

俺の物凄い中途半端の原作介入が始まった



久々に学校に行ったら知らない金髪が増えてた(後書き)

介入です



あれ？原作より強くな？

「あゝ・・・もうし止める場面じゃん・・・仕方ない終わったら介入するか」

達也、なのは、フェイト、はやて、たぶん最後の転生者が自分の全力の一撃をぶつける

ドガーーーーンッ

「終わったか・・・？」

「早く転移を！！」

闇の化け物が転移を開始される・・・だが

《ぐおおおおお！！》

「な！？」

「投影！？」

上空から怪物が作り出したと思われる武器が降り注ぐ・・・飲

み込まれたのかよ達也

「「「「「キヤアアア（ぐああああ）」」」」」

ドガガガガッガッ

「あら？ピンチ？」

お茶飲んで見学してたのに……はあく助けますか

「さあくて【魔眼発動＝直死の魔眼】今日の俺は最高で最悪だ」

~~~~~達也~~~~~

「くっ！？まさか俺の業を使うなんて」

「大丈夫！達也」

「ああ、フエイトもなのはも大丈夫か？」

「うん私達は大丈夫……それより」

そう言っただ俺たちの目の前にいる原作より最凶になった敵を見据える

「ああ、アレを如何するかだな……」

「達也、たぶんアイツ俺の能力も奪ってやがるぞ……」

俺の隣に八神恭地が飛んでくる……こいつの能力も投影し
し銃に特化した方だけどな千里眼など
射撃に関係してる能力を所持している

「万事休すか……」

「くっ」

「如何したら……」

「ハ口く親友くお困りかなー？」

そんな時俺の親友ともいえる男の声が聞こえた

~~~~戻って賢~~~~

「如何した、如何した？そんな死んだ人でも見て」

「何でお前が此処に……」

「それは簡単、俺が最後の一人だから」

俺はそれだけを言い後ろにいる化け物を見る

「よう、始めましてっで良いかな？夜天の書のバグ」

《グギヤアアア》

「おうおう怖い怖い……悪いけど死んでくれや」

キープレードを両手に呼び出し魔力と気で身体能力を上げる

「さあて久々の戦闘だが手加減無でやるぜ」

二つのキープレードを一つにしてXブレードにVerを上げる

「お前の死の点はもう見えてる……【魔眼混合発動Ⅱ時操の魔眼×直死の魔眼】【時よ止まれ】」

俺以外の時が止まる……そして俺は最強とも言える×ブレードでバグの点を全て刺し殺す

「そして、時は動き出す……」

《グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！？》

「まだ生きるか……【消去】」

そしてバクは光の粒となって消えていく……呆気なかった

「さてと……生きてるか？親友達」

「お前……反則だろ」

「誰かは知らんが反則だな……」

「にゃははは……(汗)」

「あ、学校の……」

倒してやったのに感謝も無しか！！ぐれるぞ！！

「さてと、帰るか」

「待て！！君には話を聞きたい一緒に付いて来て貰う！」

「はあゝ？てか誰？」

「管理局のクロノって言うんだ……って知らないのか？」

「いや、知ってる」

あゝ連行される……

「だるい」

あれ？原作より強くな？（後書き）

エリ才最強計画・・・こんな単語が頭を過ぎった・・・

ステータス2 (前書き)

OK?



## ステータス2

かざまけんいち  
風間賢一

筋力 A +

魔力 - (能力によってゼロ)

耐久 A +

幸運 B

敏捷 A A

能力

・闇・・・武器やハートレス、移動いろいろな事が出来る

・魔眼・・・アニメ、ゲーム、漫画で出る眼に関する能力全て  
が使える

・不老不死・・・20歳から不老

・キープレード・・・伝説の武器

・消す程度の能力・・・【くを消す】と能力を発動するとそれが消える

## 紹介

・好きな物・・・平凡、平和、楽しい事

・嫌いな物・・・非凡、めんどい事

・容姿・・・本編と同じ女顔で赤眼で黒髪、眼鏡で隠している

・性格・・・自由奔放、フラグは時々立つが自分で折る

えんどうたつや  
遠藤達也

筋力C

魔力EX

耐久C+

幸運A

敏捷C

能力

・王の財宝 ゲイト・オウ・バビロン

・投影（剣）

ス）  
・固有結界“無限の剣製”（アンリミテッド・ブレイド・ワーク

### 紹介

・好きな物・・・人の笑顔、料理

・嫌いな物・・・人の涙、黒いカサカサした物

・容姿・・・イケメンで薄い青髪に黄色い清んだ眼

・性格・・・困っていた人が居たらほっとけない、フラグメー

カー

やがみきよつじ  
八神恭二

筋力C-

魔力EX

耐久C

幸運 B +

敏捷 A

能力

・千里眼・・・千里先をも見通せる眼

・投影（銃）

・固有結界“無限の機械弾”（アンリミテッド・バレットマシーン）・・・無数の“生きた”弾が上空に飛び回っている世界を作り出す・・・それ以外は壊れた機械

・ヘッドショット・・・一撃必殺（普通は）

紹介

・好きな物・・・機械弄り、妹の笑顔

・嫌いな物・・・シヤマルの飯

・容姿・・・これもまたイケメン、白髪に黒眼

・性格・・・クールでシスコン、これまた天然



ステータス2（後書き）

まあ、こんなもんでいいかな？

自己紹介！！・・・ああ、管理局入りか（前書き）

本編の方を進めようと思うんだが・・・やる気が起きない、  
話は思いついてるんだよ？でも・・・やる気が起きない。うん・  
・・・と思ったから気分転換で最新

自己紹介！！・・・ああ、管理局入りか？

「さて、君なんだけど・・・名前は？」

「あれ？名乗ってなかったけ？まあいいや改めて風間賢一、そこに  
いる遠藤達也の親友だ」

「よろしくね、私はリンディ・ハラウンよ。お茶飲む？」

そう言って自分の飲んでいた砂糖がたっぷり入ったお茶を見せる。  
・・・

「いえ、要りません。そんな不味そうな物キツバリ」

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

「あ、あら・・・そ、そう？おいしいのよ？」

「味覚がおかしくなったら飲みますよ？いえ、間違いました“飲め  
”ますよ」

「そ、そう（ゴゴゴゴゴ）」

背中から変なオーラが出ているどす黒い紫が・・・あり  
？言いすぎた？



「聞きたいことがあるんでしょ？早くしてくれないですか？」

「そ、そうね……単刀直入に聞くは君は何者？」

「うん？だから風間賢一、遠藤達也の親友」

「そう言うのが聞きたいのではなくて貴方の目的よ」

「ああ、親友の危機だったから助けたそれだけ」

本当は、監視をするために介入したんだけどね」

「本当に？」

「嘘付いて如何するんですか？」

「はあ……次は君に魔力反応が無いのは何故？」

「」「」「嘘！？」」「」

転生者の二人以外は驚愕に顔を歪める

「今は封印してるだけですよ？多分そこにいる二人もやろうと思えば出来るんじゃない？」

「そう……最後に一つ君は敵ではないんですね？」

「さあ？敵かもしれないし味方かも知れない？それは君達管理局しただだよ」

「……分かったわ」

じゃあ俺はもうそろそろ、帰りますかね

「ケン、お前は俺が転生者だと知ってて話しかけたのか？」

「はあ？話しかけて来たのはお前だろ？それに俺が好きなのは平凡、平和お前も知ってるだろ？」

自分達の繋がりが偽りではないのかと言う考えを持って俺に話しかけてきたのがわかる……

「そうだったな……之からも俺達友達だよな！！」

「はあ？……ちげえだろ“親友”また明日」

「！！ああ、またな親友！」

うれしそうに手を振ってくる俺の親友……やっぱりお前フラ

ゲームカーだわ

「誰が帰って言いといた？」

「あり？駄目なの・・・？」

「これから君の実力をを見せてもらう」

NO.....もう俺は家に帰ってゴロゴロしたい  
!!!!

「達也!! 助けてくれ!!」

「安心しろ、手加減はするから・・・な!!」

「っってお前が相手かよ.....!!?」

俺.....! 災難は無かったのか.....!! .....え? 何々「完璧に無くなった訳ではなくランクがAからCまで下がっただけだ」何だそりゃ!? まだ先がある「普通なら転生者一人とやるはずだったんだから感謝しろ」ああ.....ありがとうございませす?



自己紹介！！・・・ああ、管理局入りか（後書き）

だ

最強VS最強・・・え？俺のほつがチート？HA！HA！HA！（前書き）

本編を進める意欲が出ない・・・あゝ面白い事起きないかな

最強VS最強……え？俺のほつがチート？HA！HA！HA！

「ケン！手加減するなよ！」

「……何故こんな事に」

俺と達也は無人惑星に来ている。何故無人惑星？つと聞いたたらア  
ースラーを破壊する気かと怒られた……。もう戦艦を破壊でき  
る強さでよくね？とか思った俺は間違いじゃない

「偽・螺旋剣」  
カラドボルク

「ちょw行き成りw」

ドガンッ

地面を抉りながら俺に当たり、クレーターが出来る……。危  
ねえヤ チャに為り掛けた

「殺す気かよ……」

「生きてるだろ？」

キーブレードを呼び出す……コイツ

「【魔力開放】 【魔眼混合】複製眼×石化の魔眼】行くぜ」

「ちよっ！卑怯だぞー！」

「【投影開始】」

フフフフフ、複製眼で投影を奪ってやったぜ……宝具は作れねえけど

「ちっ！！停止解凍、全投影連続層写……壊れた幻想」  
フロックン・ファンタズム

ドガガツガガツガンッ

達也が俺に向かって武器を投影し爆発させる

「ちっ！！【混合変更】未来視の魔眼×石化の魔眼】」

次に達也が何処に動くのかを視る。そしてそこに移動する

「やべえー！！」



「ちっだがー!!」

ドスッ

俺の目を見ないようにつに眼をつぶっている達也の腹に一撃を与える

「かはっ!?!」

「まだまだー!!」

ドスッゲシッベシッゴスッドー!ーッ

更に追い討ちをかけそして最後に達也を吹き飛ばす

「ゴハッ!?!?・・・ちっエア!?!」

「おいおい、マジかよ・・・くそ!」

達也が王の財宝から乖離剣・エアを取り出すそれを?ブレードで  
俺は迎え撃つ

「天地乖離す開闢の星!?!」  
エヌヌ・エリシユ

「うおおおおおおお!?!」

ドガガガッガガガッガ

この瞬間ある星の一部が消滅した……………てへ

「勝負？引き分けだよ引き分け！」

「今度は俺も参戦するかな」

「勘弁してくれorz」

最強VS最強・・・え？俺のほづがチート？HA！HA！HA！（後書き）

・o a s s o f b a

自分の知らない夢を見る(前書き)

## 自分の知らない夢を見る

夢を見る……その夢は“俺”は知らない。だが“俺”は知  
っている。その夢の中の“俺”は世界いや宇宙を旅している。誰に  
も囚われず、自分の好きなように生きて自分勝手に人を助け、自分  
勝手に人を裏切る、そうして宇宙を旅している“俺”は悲しみ、苦  
しみ、憎しみ、全ての感情を押し止め自分らしく“俺”らしく旅を  
する……殺されようが裏切られようが“俺らしく”を見失わ  
ずに……人との繋がりを築いていく。ただ孤独だけにはなら  
ないように……

「……………」

俺の肌を流れ落ちる雫……はぁ変な夢見ちまった

「俺は俺らしく……か」

この夢はたぶんもう一人の俺いや“オリジナル”の俺の夢……  
・はぁ“レプリカ”にこんな夢、見せるなよ

「まぁ……………」

俺らしく生きろって事かな・・・？

【「俺」と“俺”は同じそして“俺”と“俺”は違う】

だから、レプリカだろうが何だろうが“俺”は“俺らしく”生きる

「レプリカだからオリジナルとは違う生き方をする？」

それこそ、バカみてえな考えだ・・・

「俺は俺それだけで十分」



自分の知らない夢を見る（後書き）

修行中に気付いた自分の正体……まあ良いんじゃない？



駄目だ！！もう駄目だ！！俺に・・・俺に！！

「平凡を――――！！！」

「どうも皆さん賢一です・・・限界です、もう我慢の限界です。管理局に入ってからわ、仕事仕事仕事の毎日、「子供にこんなハードな仕事させるなよ！！」と思わず管理局を潰したくなるほど限界です」

「あゝあの頃が懐かしい・・・平凡にそしてのんびり、ゆったり生活が・・・」

「つと言つわけで、次の原作開始まで後10年はあるんだから？家出をすることにしました」

「これも、俺の平凡のため」

「父さんへ 俺、風間賢一は自分探しの旅に出ます・・・本当は疲れたので平凡ゆったりと暮らします。探さないでください・・・」

書置きも完成……では、10年後にまた会おう諸君！

「　　」

この日、賢一は俺達の前から姿を消した……今日からこの俺、遠藤達也が主人公だぜ

「あの野郎……逃げやがったな!!」

「アイツらしい……」

く、探しに行くか……いや、何故俺が

「はあ」

「達也君!!」

後ろから俺を呼ぶ声が聞こえる……まあ言わずと知れた

「なのは、今日は機嫌が良いな？」

「うん！一人邪魔者が消えたからね！」

「????」

「ケン、お前……つく(涙)」

邪魔者？はて誰の事だ？ケン？何で邪魔者？それになんか、恭二が泣いてるんだけど

「えへへ／／／」

「ちよっ！？／／／」

「本当にご馳走様でした」

なのはが腕を組んでくる……賢一がいたらたぶん「このフラグメーカー、一片地獄に落ちろ」とでも言うだろう。だが俺はフラグメーカーではない

「あー！！なのは！“私の”達也から離れて！」

「誰が私のなのかな？かな？」

ゴゴゴゴゴゴッ

「え？何これ」

「兄ちゃん！！おいてくなんて酷いで！」

「あ、ああ・・・悪かったなじゃあ行くか・・・」

なのはとフェイトからだす黒いオーラが出ている・・・俺はフ  
ラグメーカーでは・・・て!? 恭一、置いてかないで!?

「って!? やばい!なのは、フェイト急ぐぞ!!」

「ふえ／＼／」

俺は二人の手を握り学校まで急ぐ・・・あれ? 顔が赤いけど  
風かな?

~~~~その頃スカリエッティは~~~~

「ケンが!! ケンが!!」

「落ち着いてください!! ドクター!!」

「ケン兄・・・グス」

「チンクも、ね？落ち着きましょ？」

賢一がいなくなった事でカオスな状態になっていた

「ケンーーーーー！！カムバックーーーーー！！」

駄目だ！！もう駄目だ！！俺に・・・俺に！！
(後書き)

えへへへwやっちゃたww

STSまで遠藤達也が主人公

STSまで八神恭二が主人公

賢一以外に主人公をさせるな！！このまま賢一で続行

迷子（前書き）

本編進める……はぁ……誰か俺にやる気を――――

迷子

突然ですが皆さんに問題です。今話しかけているのは誰でしょうか？ヒント、迷子に成っていて森の中を放浪している人物。もう分かりますね？風間賢一、俺です……

「俺って方向音痴？」

歩いても歩いても森森森森森森

「どんな世界に来たのかも分からないし……」

ん……もう此処に家建てよう!!

「そうしよう!!」【闇よ我が僕達よ】それじゃ、取りあえず材料を集めて来い!!」

闇の生き物は四方八方に飛んでいく

「そんじゃ俺は此処を更地にするかな【半径50mの森は消える】」

俺を中心に次々と消滅していく木

「あ……材料にすればよかったorz」

次からは計画的にを目標にしよう……

「ん？」

ガシャンッ

如何やらいろいろな所から家に仕えそうな材料を取ってきたようだ……あれ？このネジとか何処から取ってきた？気にしたら負けか

「それじゃ、家作り始めるぞ!!」

……

俺の作り出した魔物は喋らないのが難点

~~~~5時間後~~~~

「ふっ我ながら良いできた」

俺の目の前には巨大な家……あ、やりすぎた

「まあ良いか……」

え？家作るのが早い？いや途中で作るのがめんどくさかったので  
能力で【家を作る時間を消す】ってやつちゃたんだww

「まさにチート」

この家を拠点にのんびりゆったり旅をしますか……

「とりあえず、旅は明日からって事で……ふあ、うう、寝るか」



迷子（後書き）

マジでやる気をください

問題が発生・・・やべ(前書き)

本編一話でも最新するか・・・そしたらやる気もでる、はず

問題が発生…………やべ

「よっ!！」

ザク

「はっ!！」

ザク

畑を一心不乱に耕す…………ふっ畑仕事、なんて素晴らしいんだ!!

「よし、お前ら種をまけ!！」

《…………》

無言で種を撒いていく…………あゝこいつ等喋れるように創り直そうかな…………

「ふ…………おっ?サンキュー」

《…………コク》

俺の傍にお茶を出して来てくれた一体にお礼を言う・・・・・・・・  
初めて反応する奴が出てきた(涙)

「はぁ〜茶がうめえ〜・・・・・・・・」

にしても旅に出ずにここで暮らして早五年か・・・・・・・・え？早  
く出るよ？H A H A H A H A

「原作如何でも良くなってるわ〜」

ゴクゴクッ

ふい〜茶がうめえ・・・・・・・・種を撒いていた一体が俺の傍ま  
でやって来て裾を掴み引つ張ってくる

「ん？如何した？」

《・・・・・・・・グイグイ》

そして森の奥の方を指差しジツと俺を見てくる

「誰かいたのか？」

《!!…………コクコク》

そして、付いて来いと俺に背を向け森の奥に行く…………はあ  
く仕方ない

「お前らく休憩していいぞ」

《…………》

そう言った瞬間闇に溶けていく…………てかよく考えたらさつき  
の闇で感情が作られてる？進化ですか

「おっと、こんな事考えてる暇なかった…………」

感情が形成されている闇を追いかける…………その内人型に  
成ったりしてww

「かなり山奥まで来たぞ？本当にいるのか？」

《イ…………ル》

おおおおおおおおお！？喋った！？ヤミミが喋った！？…



・・・ヤミミって何だよ

「子供か・・・ん？」

《・・・？》

俺の目の前にボロボロの子供・・・この少年何処かで・・・赤髪に青い眼・・・そして美少年って言ってもまだ5歳ぐらいだろう

「んんっ・・・お母・・・さ・・・ん」

少年から肌から落ちる涙と「お母さん」と言う悲痛な叫び・・・

「ヤミミ、この子を家まで連れて看病してくれ・・・」

《・・・？》

「お前の名前だよ・・・ヤミミ」

《！！・・・ア・・・リ・・・ガ・・・トオ》

そう言って少年を背負い家まで連れて行く・・・さてと

「俺は一仕事するかね？・・・戦闘なんて久々だぜ」

俺は少年が逃げ出したであろう施設の場所に向かう・・・さあ  
て、地獄を見てもらおうか

「管理局さんよ・・・？」

「誰だ!？」

「どうやって入り込んだ」

「クソ、実験体が逃げ出して忙しい時に」

やはり、絡んでいたのは管理局・・・しかも、あんな子供を  
実験体・・・本当に地獄を見てもらうかね

「【魔眼発動】万華鏡車輪眼】さあ、俺の眼をみな？」

「なっなんだ!？」

その場に居た研究者達を現実に近い幻術へと引き擦り込む・・・

「さあ、貴様らが罪に気付くまで永遠に地獄をみる……【罪に  
気付かずにここから出れるを消す】」

「」「」「ぎゃああああああああああああああ」「」「」

ブシャグシャズギユッ

さてと、おれの仕事も終わったし、子供の手当てをするかね



はっ！？原作ブレイクしている……まあいいか

「うっうっう」

僕は……確かあそこから逃げ出して……は！？

「こ、此处は！？」

「おっ起きたか、少年」

「へ……お姉さん誰？」

自分の横で座っている眼鏡を掛けた女性がいる

「ああん？誰が……“お姉さん”だつて？」

「ひっ！？」

お姉さんっと呼んだのが気に食わないのか物凄い威圧感を出すお姉さん……

「俺は男だ！！断じて“お姉さん”何て呼ばれる筋合いはねえ！！」

「へ……………」

これが姉さ…兄さんとの出会い…………だった

〃〃<sup>おねえさん</sup>賢一だよW〃〃

研究員に地獄を見せた後、少年が手当てして1時間が立った頃、  
眼を覚ました

「へ……………お姉さん誰？」

少年の第一声がお姉さん発言だった…………眼鏡掛けるのに  
しかも丸眼鏡なのに…………  
な…の…に、女性と間違われるのか俺は！？…………取りあえず今、  
俺が遣る事は

「ああん？誰が・・・“お姉さん”だつて？」

「ひっ！？」

少し威圧しすぎたか涙目になる少年。だが気にしない！！

「俺は男だ！！断じて“お姉さん”何て呼ばれる筋合いはねえ！！」

「へ・・・・・・・・」

涙目から、次は呆気を取られた顔になる少年・・・

「分かつたか？」

「へ・・・・・・・・？」

「W A K A T T A K A？」

「は、はい！！」

高速で首を振る少年・・・・・・・・うん、素直でよろしい

「で？君の名前は？」

「え……？」

「だから、君の名前」

「エ……エリオ、エリオ・モンディアルです」

少し戸惑っているが、名前を言う少年……しかし

「エロオ・モンデヤル??変わった名前だな？」

「ち、違います!!エリオ・モンディアルです!!」

「H A H A H A !冗談だYO？」

はい、嘘です。素で聞き間違えました……何か問題でも？  
てか原作ブレイクしてるー!!

「で、エリオは何であんな所に倒れていたんだ？」

「そ、それは……」

「ああ、言いたくなければ言わなくていいよ？」



別に知ってるし……ね？

「いえ、言います……実は」

「……此処から長くなるので飛ばします……決めてめんどくさいとか  
じゃありませんから……！」

「……何です」

「ぐすつ感動ジタ……！お前今日から家の子な……！」

「え……でも」

「文句は言わせない……！今日からよろしくな……！弟よ……！」

「っす……ズズ……ふ……ふ……ふあい……！」

泣いて俺に返事をするエリオ……エリオには苦しい思いはさせないぞ……！！……

そんな家族が一人増え、そして何か俺、父さんに似てきたかも……

・思った今日この頃

あゝ原作より強くしすぎたかな？（前書き）

本編進める時間が無かった・・・・・・へ？こっちは5分あれば書けるから良いのww

あゝ原作より強くしすぎたかな？

「エリオく飯だぞ」

「うん、兄さん！ヤミミ行こう！！」

《ワカッタ》

飯が出来たのでエリオを呼ぶ……あ、後ヤミミが人型にV  
erUPしました。で今ではエリオのデバイスです……え？あ  
あ、闇を少しちよいちよいと弄ったんですよ

「うん、いい出来だ……」

「兄さん！！僕、管理局に入りたい！！」

「ブツ！？」

突然、何を言い出すんでしょうかこの子はご飯吹き出しちゃった。  
……

「何故に……？」

「世の中を平和にしたいんだ！」



その間にエリオをある程度鍛えとく……

「さあ、ヤミミを起動しろ!」

「え? う、うん!! ヤミミ、【ストラーダ】」

《リョウカイ》

ヤミミが原作のデバイスVer 槍になる色が黒だけど……  
あ、後ヤミミは女です。

「さあ……避け続けるよ?」

「へ? え? う……そ」

ドガガガツガガガガツガ

無数の闇の刃物がエリオへと追撃される……あ、もちろん  
刃は潰してあります!

「ゲホゲホツ……殺す気ですか!? 兄さん!」

「死んでないだろ? ほら行くぞ!」

「ちょwやめw」

更に追撃させる・・・この時のエリオの言葉を聞いて俺に似てきたなあ〜なんて思ったのは内緒

「で、あれから二年・・・やりすぎた」

エリオが準最強になりました・・・まあ達也たちには負けるかな？なのは達より少し強いぐらいかな

「兄さん？」

「ん？いや時間が過ぎるのも早いなあ〜って思ったただけだ」

「そうだね・・・」

それにしても如何する・・・やばいな、このままじゃなのは達の面子が立たない。ていうか

「お前、管理局に入っても上司だけには絶対に勝つなよ？」

「何で？」

「おまwそりゃw」

やべえ、言い訳が思いつかない

「そっちの方が面白いからに決まってんじゃないかねえかww」

「流石兄さんww!!」

この時エリオが俺に毒されてるなあ〜と深く思った

「そんじゃ、後一年気合入れるぞ?」

「うん!ヤミミ【ストラダー】」

《分かった》

ヤミミが人間味あふれるようになって来ました……まあいいか。  
管理局入りは達也にでも相談するかな





S T S 開始・・・え？嘘？もう？（前書き）

本編を進めようと思う・・・出来ればこの一週間でFateを  
終わらせる

STS開始……え？嘘？もう？

エリオが修行を始めて3年、明日に機動六課が新設される

「……まずい」

「如何したの？」

《如何しました？》

エリオとヤミミが不思議そうに俺を見てくる……やべえよ  
達也と連絡取れねえよ。

「仕方ない……」

《「????」》

「明日、お前らが配属する場所に連れて行く、此処を出て行く準備  
しておけよ？」

首を傾げている二人に振り返って明日の用意をさせる

「！分かった！！」

「あつ後、ヤミミは人型には成るなよ？」

ヤミミには人型に成らないよう注意する……俺の力がばれたら嫌だしそれに

《何故？》

「モルモットになりたいなら良いけど？」

《わ、分かった》

モルモットにされちゃ困る……まあ、これで大丈夫かな？さあて機動六課に“乗り込む”か……クククク

「よし、結界OK認識阻害OK」

「兄さんは何でも出来るね……」

《流石、我等のマスター》

家に結界と認識阻害をかける……後ろで何か言っているが無視で

「そつだ、機動六課に配属してる時は槍“以外”使わないいな？」

「え〜！」

「これも修行だ」

「分かったよ……」

エリオは槍以外に武術を全て、銃、剣、拳、のありとあらゆる武器の使い方を教えた（何故か知っていた）で主な戦闘スタイルは“槍”でのスピードまあ此処は原作どおり、で槍からのバリアジャケツト？に隠してあるて言うか闇の中から武器を取り出し戦う暗器での戦いかな、後一つ鬼畜な戦い方があがるがまあそれはまた後で

「さてと……行くぞ？」

「うん！」

闇でゲートを作る……ヤミミは如何やらエリオの影に入ってる様子

「まあ……お約束かなああ？」

「ぎゃああああああ！？」

ゲートを繋げて出てみれば空の上……まあ結果から落ちてます。エリオが五月蠅いです

「んっ？エリオ？」

「なあああにいいいい！??？」

「アレがお前の配属する場所だぞ？」

「アレが……兄さん」

「ん？」

エリオが俺のほうを真剣で見ってくる

「何でそんなに落ち着いてるんですか！？落ちてるんですよ!?!? 付く前に真っ赤な花が咲くじゃないか!?!」

「H A H A H A 大丈夫だ」

「あ、そうなんですか……何か打開策が」

「そんなに柔に育てた覚えは無いb」

此処でサムズアップ!!決まった!



うと逆ですww

ドーンッ

ちゃんと威力は抑えてあるので悪しからず・・・人が二人通れる  
穴が開くだけだから

「ふいい到着!!」

「ゲホゴホッ」

あれ？視線が痛い？何故だ・・・当たり前かww



STS開始・・・・・・・・え？嘘？もう？（後書き）

？着いた場所は平行世界

？いや普通に良いですよ

？任せます

何となく思いついた事をアンケート

到着！！目線が痛いですww(前書き)

やはり無理だ

到着！！視線が痛いですww

「いよいよ、はやての夢が叶うな」

「ああ、立派に育ってくれて兄は嬉しい」

俺と恭二は、はやてが新設する事になった機動六課について話していた

「相変わらずシスコンだなw」

「ふっ……何が悪い？」

開き直る恭二……面白くねえ、今思えばケンがいなくなっ  
て10年か

「あいつ、今頃何してるんだろうな？」

「ん？……さあ、もしかしたら空から落ちてるのかもしれないぞ？」

正解です。現在進行形で落ちています

「達也君！恭二君！時間だよ」

「「おう！」」

なのはに呼ばれる。これから俺達の戦いがまた始まる……そして俺達は始まりのドアを開けた

ドガンッ

「な、なんだ?!」

「行き成り敵か？」

慌てて中に入り音の鳴った方向を向くと、あいつが居た……  
・本当に始まりのドアになった

~~~~賢一とエリオ~~~~

「おっ達也じゃん!」

「誰ですか？兄さん」

「俺の親友兼フラグメーカー」

エリオに聞かれたので正直に話す

「俺はフラグメーカー何てもんじゃねー！」

「はははははは……そう思うか？恭二？」

「思わんな……」

「てめえら！！」

突っかかってくる達也を右から左へ受け流す

「賢一君？ちよつとO H A N A S I I いいかな？」

「え？何でデバイスを構えてるんでしょうか？？皆さん」

これまた懐かしい面子がデバイスを構えて俺を睨んでくる

「そんなもん簡単や上みい」

「え？……ああ把握」

「ふふ……サヨウナラ」

ドガガッガガガーン

俺は星になった……なんて事は無く

「うし、もういいな？」

「あれ程の砲撃を喰らって無傷なんて化け物ですね兄さんw」

「言つなエリオ……」

「ケン、その子供は？」

「ん？ああ、此処に配属してもらいたい奴で俺の弟エリオ・モンデ
イエルだ」

「……はっ？」「……」

皆さんが驚愕？呆気の顔をしている……あ、やっぱり駄目です
かね？

「お前、その子まだ管理局員じゃねえだろ？」

「あ、そこは大丈夫ほら」

「は、配属許可書」

ははははは、こんな事も有ろうかと父さんに頼んでいたのだ!!

「だが、それなりの能力が無ければ!!」

「そこらも大丈夫、地獄の特訓をして、そこら辺の魔道師には負けないからww(本当はそれ以上だけど)」

「それを決めるのはウチや・・・ええな? エリオ君?」

「は、はい!」

もう大丈夫かな・・・さてと徐々に父さんの顔見に行こう

「何処に行く気だ? ケン」

「ん? 親に顔を見せに行く・・・」

「ああ、なるほど・・・何て言つと思つたか?」

「へ・・・?」

「お前もエリオと一緒に試験だ」

「ふえ……？」

達也曰く……俺も機動六課に配属する事になったようだ

達也曰く……俺の魔力値及び実力の再確認だそうだ

達也曰く……拒否権は無いようだ。まあエリオが嬉しそうだからいいか……

ステータス3・・・これやり始めたら止まらない (前書き)

ステータスでゝす

ステータス3・・・これやり始めたら止まらない

かざまけんいち
風間賢一

筋力AA+

魔力 - (能力によってゼロ)

耐久AA+

幸運B

敏捷S

能力

・闇・・・武器やハートレス、移動いろいろな事が出来る
・魔眼・・・アニメ、ゲーム、漫画で出る眼に関する能力全て
が使える

・不老不死・・・20歳から不老

・キープレード・・・伝説の武器

・消す程度の能力・・・【くを消す】と能力を発動するとそれが消える

紹介

・好きな物・・・平凡、平和、楽しい事

・嫌いな物・・・非凡、めんどい事

・容姿・・・本編と同じ女顔で赤眼で黒髪、眼鏡で隠している

・性格・・・自由奔放、フラグは時々立つが自分で折る

目標

・平凡のんびりゆったり生活

えんどつたつや
遠藤達也

筋力 B +

魔力 E X

耐久 B

幸運 A

敏捷 B

能力

・ 王の財宝
ゲイト・オラ・バビロン

・ 投影（剣）

ス）
・ 固有結界“無限の剣製”（アンリミテッド・ブレイド・ワーク

紹介

・ 好きな物・・・人の笑顔、料理

・ 嫌いな物・・・人の涙、黒いカサカサした物

・ 容姿・・・イケメンで薄い青髪に黄色い清んだ眼

・ 性格・・・困っていた人が居たらほっとけない、フラグメー

カー

目標

・ 大切な人を守る

やがみきょうじ
八神恭二

筋力 C +

魔力 EX

耐久 B

幸運 B +

敏捷 A A +

能力

・千里眼・・・千里先をも見通せる眼

・投影（銃）

・固有結界“無限の機械弾”（アンリミテッド・バレットマシーン）・・・無数の“生きた”弾が上空に飛び回っている世界を作り出す・・・それ以外は壊れた機械

・ヘッドショット・・・一撃必殺（普通は）

紹介

・好きな物・・・機械弄り、妹の笑顔

・嫌いな物・・・シヤマルの飯

・容姿・・・これもまたイケメン、白髪に黒眼

・性格・・・クールでシスコン、これまた天然

目標

・妹の晴れ姿

エリオ・モンディアル

筋力 A +

魔力 A A

耐久 A A A + (賢一の砲撃を受けていたら何時の間にか)

幸運 B

敏捷 A A +

デバイス

・ヤミミ・・・エリオのパートナー、想像した武器に変形または作り出す

・バリアジャケット・・・ヤミミが作り出した武器を取り出す事が可能

・???????

紹介

・好きな物・・・ヤミミ

・嫌いな物・・・研究者

・容姿・・・美少年、赤髪に青眼

・性格・・・真面目で少し賢一に似ている

目標

・自分と同じ存在を作り出させないこと

ステータス3・・・これやり始めたら止まらない (後書き)

転生者(賢一除く)は能力がチート・・・エリオは身体能力最強

ガジェット無双!!.....って多すぎ!?(前書き)

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

ガジェット無双!!……って多すぎ!?

「エリオ……」

「何ですか……兄さん？」

「何だろうな?この状況……」

「さあ……」

俺達の目の前にはガジェットの群れ群れ群れ群れ群れ!!……
って多すぎ!?

「あの野郎、覚えてろよ」

「そうだね……ww」

俺達は此方を見て笑っているであろう男……達也を見る

「【カズマ】!!」

「ヤミミ【ストラーダ】!!」

拳を握り締め魔力を腕に凝縮する……此れによってスクラの真似をしていますw

「唸れ！もつと唸れ！シエルブリットー！！！」

ドガガガツガガガツガガツガガ

1万近いガジェットを7分の1程破壊する……あ、案外爽快かもww

「一撃惨殺【ダークランス】」

ストラダーに自分の魔力と闇を混合させたものを注入していく……見た目はもうアレです。貴方のそれですww

「滅びな……」

ゴゴゴゴゴゴゴオオゴゴゴッ

最後に指を鳴らし突き立てた槍から半径200mが闇で包まれる……エリオかつこよすw

「よし、終わった!」

「そうだね、兄さん・・・」

あれ?何か皆さん驚愕で眼が開いたまま何だけどww

「如何だった?」

「如何だったじゃねえだろ・・・お前は兎も角エリオが原作以上じゃねえか」

「てへ 後悔はしてるw反省はしてないw」

「はあ、俺達でも危ういぞ?あの技」

いや危なそうに見えるけど1対1でする技ではありませんwwそれにな・・・

「いや、そうでもないぞ?」

「兄さん、後よろしくお願いします・・・すうすう」

「たく、大技使うから」

魔力を殆ど使い果たして睡眠状態になりますww

「なっ？」

「そうみたいだな・・・」

改めて自己紹介(前書き)

ワ・タ・シ挫けそうです。はあゝ進めるんじゃなくて編集しようかなあゝ

はあゝ・・・もうね・・・アレ、完璧に今すぐ編集しろって事だよね?・・・はあゝ

改めて自己紹介

「つと言つわけで機動六課に入隊する事になった、風間賢一と」

「エリオ・モンディエルです！」

「よろしく」お願いします!!」

機動六課に入隊が決まり・・・さらに俺はリミッターを付けることになりました。まあ、いつでも外せるけどねえ」

「で？俺は何をすれば？」

「さあ・・・？」

「突然やったから、まだ決まってないんよ。今はそうやな・・・エリオをお願いや」

横からはやてが会話に入ってくる・・・エリオのトレーニングか、何も変わってねえ」

「つと言つわけだから、エリオお前の鍛錬教育をする事になった」

「また、あの地獄の日々が続くの!？」

エリオが他のフォワード陣と話している時に俺が鍛錬をする事になったことを告げる……仲良くなってるなwwうんうん

「で、その子達が他の?」

「は、はい!私はティアナ・ランスター二等陸士です!」

「ああ、そんなに畏まらなくて良いよ?俺階級持ってないからww」

「」「」「え?!」「」「」

あはははw……渡された階級全部、旅する時に「ぽいつ
したww

「それでどつやって管理局に……」

「聞きたい……?ww」

「いえ!結構です!」

え……面白くないな……え?そりゃ脅ry

「で他の子も名前を覚えてくれたら嬉しいだけ?」

「あつ、私はスバル・ナカジマです。よろしく願いします!」

「うん、よろしく」

活発的な女の子だね……うん?この子何処かで……まあいいか

「キャロ・ル・ルシエです……よ、よろしくお願いします」

「うん、よろしく……エリオと仲良くしてあげてね?」

「は、はい」

後出来れば、その頭に乗ってる竜何とかして欲しい……めっちゃ睨んでる

「それじゃ、エリオ明日から始めるからな」

「え?今日は如何するの?」

「ああ、ちよつくら親に顔見せに行くから今日は無し!」

「ほ……わかったよ」

久々の帰郷（前書き）

スクラップ

久々の帰郷

「お土産のレリックOKよし行くか……」

俺は管理局の嚴重そうなところに有った、レリックを持って父さんのところに行く……案外簡単に手に入ったんですよwwあははは

「他にもやばいロストログアがあったけど……」

まあ、これだけで良いよねww？

アジトまでのゲートを繋ぎ中に入り込む……いわゆる転移

「オッハー父……さ……ん……」

俺の目の前に広がる俺の幼い頃の写真写真写真……怖えええええええ

「ケン……に……い……？」

「あつち、チンクか？」

「ケン兄ー！！！」

チンクに抱き付かれる俺・・・・・・・・それと写真

「元気にしてたか？」

「うん！！！」

そうかそうか、と言って頭を撫でる・・・・・・・・それと写真

「何時までも抱きついてないで、父さんの所に連れて行ってくれな
いか？」

「はっ！？・・・・／＼ああ、分かった！」

赤くなって俺から離れるチンク・・・・・・・・それと写真

「ドクターはラボにいる付いて来てくれ」

「ああ、分かった」

俺は力オスな部屋から出る……たくさんの俺の幼少の頃の
写真が貼り付けられた部屋を

数分歩いたところで、ラボらしき扉まで付く

「此処です……ドクター入ります！」

「ああ、チンク入りたまえ……！？ケン、生きていたのか！！」

死んだ覚えはありません……死にそうに成った覚えもあり
ません……

「父さん、10年ぶりだねww」

「ああ、大きくなったね」

「で、また何かの趣味か？」

「は……？」

父さんの目の前のポットには女性が入っている……また変な
趣味に……

「ち、違う！彼女達は調整をしてるんだよ！」

「……ああ、戦闘機人ね。はあくあつお土産此処に追いとくか
ら」

「ん？ああ、ありがとう」

それにしても……何人いるんだ

「でだ、ケン？」

「ん？なに」

神妙な顔で衛俺を見てくる……何だ？何か問題でも起きた
のか？

「君にはレリックと言うロストロギアを……だからお土産……
」???

俺はそこら辺の机に置いていたレリックを父さんに見せる……

「……流石、我が息子……」

「凄いです！！ケン兄！」

うん、親バカとブラコン……久々だなこの空気

「ケン……（ゴゴゴゴ）」

「ふひ!?」

後ろから肩に手を置かれる、更に物凄い殺気……だ、だれだ!?

「ウーノ姉……さん？」

「貴方がいなくなってこっちは大変だったんですよ？だから」

「だから……?」

「フフフフフフ」

先が物凄く気になるー！ー！聞いてちゃ駄目なんだろうけど、気になるー！って、あれ？あの何処へ連れて行く気ですか？ちょWやめWアッーーー！

久々の帰郷（後書き）

先生バスケがしたいです・・・or2

なんてネエ！

番外編 part 1 「俺の時代が来た!!」 (前書き)

要望があったので・・・あ、他にも要望がある人はドシドシ感想に書いてください!やる気が有ったらするので・・・ww

番外編 part 1 「俺の時代が来た!!」

「うっっ (本当に転生してやがる!!)」

「あら? 眼が覚めたのね」

「うっっ (これが俺の母親・・・美人だね)」

俺が眼を覚めると同時に体を抱きかかえられて、体をゆっくりと左右に揺らされる・・・やべまた眠気が・・・

「達也? ご飯よ?」

「はい!」

どうも皆さん達也5歳です・・・え? 時間が立つのが早い? 分かった

5年間何をしていたか簡単に説明する

0歳・・・体を動かす事が出来ない&眠気がすごい

1歳・・・眠気が無くなって来た&体はまだ動かせない。王の財宝を展開できるか試す

これの繰り返しで王の財宝の中身覚えて暇を潰していた

2歳・・・体が動かせるようになった。取り合えず動く練習をする&魔力を抑える練習

3歳・・・魔力を一般人レベルにすることが出来た&体を鍛える

4歳・・・それなりに体を鍛えられた&図書館に行っているんな武器を調べる

5歳・・・投影の練習と言うより想像の練習 今、此処

っと言っわけだ、分かってくれたか？そして一つ大事な事を言い忘れていた

「達也くん！」

「ん？なのはちゃん如何したの？」

「一緒に遊ぼ！」

魔王こと高町なのはが俺の幼馴染である・・・まあ、いいか

「うん！何して遊ぶ？」

「うーんとねえ〜お医者さんごっこー！」

やっぱり良くないです……俺、精神年齢20ですよ……
・それがお医者さんごっこ犯罪じゃー！ー！！

「駄目……？」

「うっ……」

上目遣いで俺を見てくるのは……そんな眼で見られたらそんな眼で見られたら……断れないじゃないかー！ー！！

「わ、分かったよ」

「じゃあこれ着て！！」

「へ……？」

渡されたナース服、え？俺がこれ着るの？何でなのはが普通の医者なの？普通逆でしょ？て言うか

その血でてるよ？鼻から……なのは、これが目的だったのね
Orz

「てか何で俺のサイズに合うんだこのナース服……」

「私に達也君の事で分からない事はないの!」

左様ですか・・・そう言えばこの世界に他の転生者がいるって
言ってたよな

確か後2人だっけ?その内一人には気をつけろって神が言ってたけ
ど・・・まあ何とかなるか

少し本気の考え事+現実逃避を終える俺・・・orz

「ナース服の達也君・・・はあはあ」

「あれ?なのは・・・どうし」

にじり寄って来るのは、いや獣・・・ちよ、食べられる!?

「落ち着け!なのは!なっ?」

「はあはあ・・・」

やばい!本気で食べられる!・・・あまり使いたくないが・・・

俺はなのは耳元まで近づいて

「ふう〜」

「にゃっ／＼／＼」

息を吹きかける・・・た、助かった

こんな原作前の俺の生活

番外編 part 1「俺の時代が来た!!」(後書き)

やっちゃたぜ!だが後悔はしてないぜ!

感想評価待ってるぜ!

思わず最後に全部「ぜ!」って付けちゃうぜ!終わりだぜ!

番外編 part 2 入学式・・・「俺様が主人公」(前書き)

続き希望がありましたので・・・？

番外編 part 2 入学式・・・「俺様が主人公」

今日は俺の入学式だぜ・・・また小学生をやるのか変な気分

「達也くん！待って」

「ん？なのは、おはよう！服、似合ってるな」

「ふえ／＼／ありがとう・・・」

なのはが顔を赤くする・・・風か？

「しかし・・・」

「如何したの？」

「ん？いや何でもないよ」

現実の私立聖祥大附属小学校をこの眼で見るときが来るとは・・・
・人生分らないものだな

「達也、置いていくわよー？」

「あ、ちょ待ってよ母さん達！！ほら、なのは行くぞ？」

「え、うん／＼」

なのはと手を繋ぎ母さん達を追いかける……原作開始まで
後3年か

「お、なのは！俺たち同じクラスだ！」

「本当！？やったー！」

クラス名簿を見てなのはと同じだと言つのを伝える

「母さん！俺達先にクラスに行つていい？」

「場所分かる？」

「うん、完璧！」

「そう気をつけていくのよ？」

「はい、行こう？なのは」

「うん」

俺たちは自分のクラスになる教室に向かう……

「え〜と俺の席は……此処だ！」

「席離れてるね……」

「ははは、別に話せないわけじゃないんだからさ、そんなに落ち込むなって！」

「うん、そうだよね！」

そして、俺は自分の席に座る。ふつと横を見ると一見女に見える男子がいた

……これが俗に言う男の娘か!?

「君……!」

「ん? ああ、俺? なに」

「俺は遠藤達也って言うんだ、よろしく君は?」

「ああ、風間賢……」

何故かビクビクしている賢……俺なんかしたか?

「あの後ろにいる人って賢一「聞くな」……ああ（汗）」

教室に入ってから、ずっと後ろで賢一の写真を取ってる人の事を聞こうと思ったんだが……
ってあれ？

「賢一の親何処かで……」

「さ、さあ？気のせいじゃない？」

何故かこの人アウト！はい、アウトー！見たい顔に変わる賢一……
・俺そんなに変なことあったか？

「賢一って何処に住んでるの？」

「南地区……」

「へえ」

そんな感じで話し込んでいると教室に先生がやって来る。どうやら入学式のようにだ……

「達也君？その娘、誰かな？かな？」

「え？け……け賢一の事？」

「俺の事がよorz」

なのは近づいてきて賢一の事を聞かれる……てか怖ええええ

「賢一？あれ？その娘、女の子じゃないの？」

「ち、違うよ男の子だよ！」

「は、どうせ……どうせ俺なんか……orz」

賢一がその場にorz体系をしたままブツブツ言い出す
とりあえず、お……んん賢一の為に誤解を解く

「そう、よかった……」

「何が良かったんだ？」

「な、なんでもないよ／＼」

「フラグメーカーか……」

賢一が何か言った気がするなんだろう？取り合えず否定しとく

「ちげえよ」

「聞こえてたのか!？」

「何となくだよ・・・」

あ、そうですか、と言つてまた何か不穏な事を呟く賢一・・・
どうやら体育館に入場するみたいだ

「はあくめんどいな」

横で賢一が愚痴る・・・こいつはめんどくさがりやだな・・・
これが賢一の第一印象だが

「確かに・・・」

「だろ?分かってる」

二度目になるとめんどくさい・・・まあ賢一は違うんだらうけど

追記:アリサ、すずかはきちんといました・・・以上

番外編 part 2 入学式・・・「俺様が主人公」(後書き)

まだまだ、ご希望があればドシドシ感想に書いてください！

管理局……俺的には管理局“員”が嫌い(前書き)

管理局……俺的には管理局“員”が嫌い

「で？父さん俺はそのレリック？ってのを盗って来れば良いんだな
」？」

「ああ、それで私の願いが叶う」

「まあ……いいけどさ」

何気にそれ死亡フラグじゃない？……と思ったのは内緒

「じゃ、俺行くわ」

「ああ、気を付けて行くんだよ？」

「分かってるって、もうガキじゃ無いんだから」

そう言い残しエリオの初任務を手助けしに行く……そういやエリオの事、話すの忘れてた

「まあいいか……つで、あの列車の中にレリックね」

はあ、めんどくさ……よく見たらフォアード達が戦っ

ているのが見える、空は達也達が

「まあ、ガジェットに気が向いてるうちに……【闇よ】」

列車の中にあるレリックを列車のなかに出来ている影を使い、詮索する

「お、この危険な感じは……発見」【転移】

俺の手元に闇が集まりその中から転移したものが落ちてくる……

「うわ……」

そして落ちてみたものを見て俺は絶句する……どドゴーン
ール……？（汗）

「さてと……詮索詮索」

見なかった事にして、レリックの搜索の戻る……

「よし今度こそリックだ……………」

俺の後ろには今までに出てきた危険物がある……………魔道書、
英雄の剣、緑色の勇者の剣その他いろいろ合った……………この列
車は宝の巣窟か

「取り合えず闇に嚴重に封印しとこ……………」

中には、なんちゃって自爆ボタンがあった……………何故か名前
を知っている。確か星一個分を破壊するほどの威力……………そ
して何故かどれだけの威力か知っている。

「と、とりあえず、父さんに転送」

そして任務完了……………なんかとてつもなく疲れた……………

「お、如何やら向こうも終わった見たいだし？俺は六課に戻るかね
」

エリオには悪いけど初任務は失敗だ……………

「さてと……………寝るか」

俺は宛がわれた部屋に戻りベットにダイブする……

「今日は……疲れた……ZZZ……。」

番外編 part 3 「賢一は語る!!」

どうも、皆さん賢一です。何故番外編なのに俺かと言つと・・・
・ハイジャックだww
「ちょwおまw」つと思つた人正しい反応だ・・・でハイジャック
したは良いが

「何をしよう・・・」

よし決めた、達也の天然フラグメーカーがどれ位か語ろう・・・
そう、あれは学校の帰り道だった

「ケン！帰ろっぜ」

「は？なのはちゃん達と帰れよ。桃色係長」

「用事があるんだつてよ、今日・・・てか何だよそれ」

「毎日お前の周りは桃色だからだ。」

「????」

何を言っているのか分からないと言わんばかりに首を傾げる達
也・・・この時はまだ俺は達也の

天然さを侮っていた

「でさ帰ろうぜ!」

「はあ、わかった」

そう、本当に侮っていた

ドンッ

「キャッ!」

「うわ!」

廊下の曲がり角で女子とぶつかる達也……そう、コイツ近藤達也は

「いたたたッ……」

「大丈夫、君?ほら」

「あ、ありがとう……」

「いや、俺がよそ見してたから、ごめんね」ニコッ

「・・・・・・・・／／／」

女の子を立ち上げらせ満面の笑顔で謝罪する達也・・・・・・・・そう
コイツ近藤達也は！！

「大丈夫？顔、赤いよ？」

「う、うん／／大丈夫！！」

そのまま何処かへ行ってしまふ・・・・・・・・自然に女性と出会いフ
ラグを立てる

「あの子大丈夫かな？」

「だ、大丈夫なんじゃね（汗）」

ドサササッ

「うわ！？」

「あ！す、すいません」

達也が走り去った女の子を心配していると階段から大量のプリン
トを持った女の子とぶつかり、プリントが廊下に散らばる・・・・・・・・
究極天然フラグメーカー！！

「こっちこそ、悪い！手伝うわ」

「あ、ありがとう」

・
・
・
・
・
俺も手伝ってます

「はい、此れでお終い！」

「本当にありがとうございました」

「こっちも悪いんだし良いつて（ニコッ）」

「は、はい／＼／」

そして、又もや顔を赤くする女の子・・・俺はこの時本当に達也の恐ろしさを味わった、何故なら帰るまでにフラグを立てた女の子が10は超えていた。何故女の子？それはな、

「君何歳？」

「俺？9歳だぜ！！」

「かわいい!」「」

大人にもフラグを立てるからさ……何だろっ男としてコイツを殺さなきゃ行けない気がする

番外編 part 3 「賢一は語る!」 (後書き)

最新! !つとまあ 何だ あれだ、達也【呪い】同
盟を作ろうか

番外編 part 4 「ある日の日常」 (前書き)

最新が遅くなっている………うーむ、まあいいか！

- ・番外編が長くなりそうだ……次の話ではっばと終らせようか……
- ・フフフフ

番外編 part 4 「ある日の日常」

よっ！皆ひさしぶり！今日から俺達は3年生だ。いよいよ原作が始まるぜー！！

「達せくん、おはようー！」

「おう、おはよう！なのは

「たつやくくん！お・は・よ・う・っ？」

「……なのは、急いぜー！」

「うんー！」

「あれ？無視？あれ？」

賢一が何かを言っているが無視だ……なにが「お・は・よ・う・っ？」だ、死ね！

「ありゃ〜置いてかれた……テへww」

グシャッフダウhkhチウアgツイニfvS!!

「ギャー……ツクツクの攻撃」どくしゃの

何だか後ろが凄い事になってる気がする……だが見ては行けない。そんな気がする

「って！？やばい本当に遅刻する。急ぐぞなのは!!」

「え?!う、うん／＼」

なのは手を引つ張り学校まで走る

「はあはあ……ま、間に合った」

「だ、だね」

「よう!遅かったな?」

「にやつ!?ケンイチ君!？」

俺達の目の前に置いてきたはずのケンイチがいる(何故か頭に勇者が持ってそうな剣が刺さっている)

「何時の間に……」

「ふっ君達がお子ちゃまだからさw」

眼鏡を人差し指で上げ、見下したように言う。……何だろ
う、すんげえむかつく。意味わからねえけど、すんげえむかつく

「死ね！」

シュッ

「ふっ当たらんな」

俺の全力の拳を当てようとするが全て避けられる……本当
にコイツは謎過ぎる

「男の娘の癖にー!!」

「だれが男の娘だー!!」

そこからどうなったかは、ご想像に……負けてませんよ？え
え、負けてませんとも、あの時はアレ、腹が痛かっただけですから
ええ

「この問題が分かる人ー？」

「「「ハイ!!」「」ZZZ。。。」

全員が手を挙げる・・・おお、元気だネエ・・・それに比べてこいつは

「ZZZ。。。。茶がうめえ・・・ZZZ」

どんな夢だよ!!・・・てか寝るなよ!!

「じゃ・・・ケンイチ君!!」

「ZZZ・・・。うっ?ふぁい?なんでしゅか?」

「この問題の答えは?」

ほら寝るからだよ・・・此処って小学校だよな・・・?いかんいかん

「27でしょ・・・ZZZ。。。」

「せ、せいかい・・・はあ座ってよし」

「ふわあ〜いZZZ。。。」

そして速攻で寝るケン……コイツを見てると小学校？って気分になる

「zzz……へいぼんだ〜zzz……」

「はぁー」

友達間違えたかな？……

番外編 part 4 「ある日の日常」 (後書き)

感想評価待っています

機動六課よりしいならば戦争だ (前書き)

希望があつたので……え？言われなくても最新しろ？

あ……すいやせん……ええ、反省？してますよ……うん、してますとも

え？もういい？……ならば最新だ！！

機動六課よろしいならば戦争だ

「エリオく外周が終わったら飯行くぞ」

「はっはい……に、兄さん」

足に重りを付けたへとへとのエリオに軽く言う……ふむ
00？は流石にきつかったか？

「先、行ってるからな？」

「ちょw放置ww勘弁w」

俺が冗談で行ったつもりが冗談に聞こえなかったらしく、物凄い
速さで外周を走るエリオ……元気そうだな……うん明日
は150かな

「あれ？悪寒が？」

「終わったか？」

「う、うん」

「じゃ飯行くか？」

「はい!!」

リオ　　つと言っわけで来ました食堂……そして横で食事を頼む工

「何時ものスペシャルハンバーグデラックススーパージャイアント
セットお願いします!!あ、あとご飯大盛りで!!」

え?なに?スペシャルハンバーグデラックススーパー何だって?
え?何それ?

「何コレ怖い……」

「ハグハグっ!!」

俺の目の前で特々々大(ここ大事)のハンバーグ?と言っより肉
を食っエリオ

「うっ気持ち悪い……」

「如何したの?兄さん」

「い、いや何でもない」

まさか、食事に一切手をつけずに食べてる姿に腹がいつぱいになつて気持ち悪くなるとは……
エリオ恐ろしい子!?

「兄さん、食べないんですか？」

「え？ああ、腹がいつぱいでな……ああ……」

な、何と言う事だろうか……俺の目の前に広がってた箸の肉がなくなっている……

「じゃあ、残ってるの食べて良いですか!？」

「ええ?!、いや良いけど……いや良いのか？」

と思索していたが時既に遅し……エリオは何と俺が「良い」と言う言葉を聞いて

いや、聞いた瞬間食べ終えてしまっていた……

「ご馳走様でした!あれ?食べちゃダメでした？」

「いや、良いんだが……うん良い筈」

もういいや、めんどくさい……原作よりエリオが食う件に
付いては捕虜

「さて、食った事だし、午後の訓練を開始しますかね……な、エ・
……リオ」

「僕もフェイトさん達の訓練に参加しても良いですか!？」

「え?……でも」

何時の間にか傍に居た隊長達の所に行っているエリオ……ああ、
大丈夫です。フェイトさんすぐ連れて行くんで

「ちょw照れんなよww」

「ちょw照れ隠しじゃないってww」

エリオの襟首を掴んで引きずっていく

「地獄の特訓wwって!?!いやーーーーーっ!」

っと言っわけでまたまた訓練中

「ほれ、エリオ避けねえとすぐにハリネズミだぞ」

「ギャーっ!?!」

叫びながらも性格に避け続けるエリオ……あつたれー
!?!っどごほごほっん、成長したな

「ほれ、今度は組み手だ。どっからでも掛かって来んしゃい」

「うおおおお!?!」

「ハイ残念」

振り被った手を受け流し、そのまま後ろへと投げ飛ばす

「まだまだ!?!」

「ハイ残念」

「ああああ!?!」

「残念無念また来週」

「この腐れ女顔が!?!?!?!」

「死ね」

「スイマセンでした……」

「反省してるか？」

「はい」

最終的にボコボコにされたエリオ土下座モードと腕を組んで見下ろす俺……

「ふう、疲れた」

「お前、大人気ないぞ……」

「俺は永遠の少年、【エターナルボーイ】だ」

ケインチは【永遠の少年】^{エターナルボーイ}の称号を手に入れた

「変な称号を作るな」

「へいへい」

「それにしてもエリオってどれくらい強いんだ？」

「ん？まあ、俺と組んでお前等以外の隊長とフォアード全員を倒せ

るぐらいかな？」

俺は言っではなら無い事を言ってしまった……そう後ろに
奴等がいたのに

「へー、物凄い自身だね？賢一くん？」

正解は隊長方です

「ワオ、イツノマニソコニ？」

「最初ッからだよ？」

「フッフその自身、鞘の錆にしてくれるわ」

っと言うわけで……よろしいならば戦争だ……あれ？無理
やり感が

機動六課よりいいならば戦争だ（後書き）

まあ良いよね？

機動六課の暴力反対

「兄さん、何ですかこの状況？」

「何だろうな、弟よ」

目の前でデバイスを構えるのは達……いやあん そんなに怒らないで

「兄さん現実逃避しないで」

「スマン……」

エリオからの冷たい視線が突き刺さる……悪い、反省してます後悔してます

「行くよ!! 賢一くん、エリオ!!」

出来れば来ないで下さい

「手加減はしてあげるからね……」

低い声で言っても説得力無いです……

「ぶっ潰してやる」

ワイ、ツブサレチャウゾ〜

「多数で戦うの気が引けるが……まあいいだろう」

「戦わない」て選択肢は無いんですね……わかります

「兄さん僕死ぬんでしょうか？」

「H A H A H A H A」

「はぁ……」

そして戦いが始まる……取り合えず距離をあけますかね

「エリオ、掴まれ」

「OK〜」

「逃がさん!!」

シグナムが素早い動きで俺達に近づく……それでも遅いけどね

「よしっ！それじゃ〜超々遠距離射撃の始まりだ〜」

「ヤミ、【魔力出力】」

《了解》

エリオのストラダが魔力によって何本も現れる

「まあ俺は適当に……あつたあつた」

俺はそこら辺にあった石を拾い上げる……そして一方的に始まる攻撃の嵐

「第一頭振りかぶって投げたッ!!」

ブウン!!

「一つ目、狙いは前方の敵【行け】!!」

シャッ

エリオの周りに合った一つの魔力の槍が前方へ飛ぶ

投げて思い出したけど、当たったら死ぬんじゃない？魔法じゃないし……アハハ次は魔力で

く六課チームく

「クツ取り逃がしたか！」

「慌てずに行こう！シグナム」

「ああ、そうだな」

でも、あんな一瞬に転移をするなんてやっぱり油断はできない

ドガーーーーンッ

「くくくく……」「くくく」

先程まで自分達が居たところが何かにより破壊される……本当に油断できない!?

「フェイトちゃん!!前!!」

「えっ!?!」

魔力の槍がフェイトへ襲い掛かる

「ック」

ガン

それをなんなくはじき返すが・・・更に追い討ちをかける様に
何十本もの槍が

「うそっ・・・」

ドガガガッガガガガガ

くエリオ+aく

あれ!?!俺主人公だよね!?!

「兄さん、一人倒したみたいですよ」

「ん？・・・おゝ本当だ本当だ、よそ見してるからゝww」

軽く話しているが周りでは何本もの槍が前方へと進み、そして賢一の周りには何千もの魔力が発生されている

「そんじゃゝまあ・・・ナマエは【流星群】って所かな？」

シュシュシュシュシュ

一斉砲火・・・その一言で事が・・・勝敗が付いた

機動六課の暴力反対（後書き）

感想待ってます

機動六課〜しつこい人は嫌われるよ〜（前書き）

感想待って魔〜ス

機動六課くしつこい人は嫌われるよ??

「はあはあ……見つけた」

「流石……と言うべきかな」

あの何千もの魔力弾を避け切り此処までやってきたのは……
不屈のエースは伊達じゃなかった

「僕なら絶対落ちてましたよ～あんな規格外攻撃WW」

「特訓追加だな」

「ちょWMマジ勘弁WW」

目の前に敵が居るのに悠長に話す俺達

ブチッ

「「ブチ……?」」

「ブツブツ……あれ……なめ……こ……そう」

ゴゴゴゴゴオゴオ

「ちよっ落ち着きましようよ、なっなのはさん・・・」

「スター・・・・・・・・」

聞き耳を持たずにそのまま言葉を続ける

「殺るならこの愚兄を!!」

「ちよっおまww」

エリオが俺の背後に回り俺を前に突き出す

「ライト・・・・・・・・」

「「あ、オワタ」」

「ブレイッカーーーーーーッ」

ドガガッガガッガガッガガッガ

兄さん〜綺麗なお花畑が見えるよ〜

アハハ〜綺麗だな〜

あ、お父さんとお母さんだ〜

あ、オリジナルだ〜

「はっ!?!?」

俺たちが目を覚まして見た景色は白い天井だった

「兄さん……女の人って怖いですね」

「そつだな……」

「最後に一言良いですか？」

「なんだ？」

此方を向き一言

「負けてやんのww」

「テメエもだろうが！！」

ガシャンツドガツボカッ

部屋で暴れ周り部屋を半壊させ、また女性の怖さを知った二人だった

機動六課〜しつこい人は嫌われるよ〜（後書き）

感想評価まってま〜す

ホテルなんちゃら〜この格好に悪意を感じる〜（前書き）

シリアスな場面を書くのに耐えられないからこつちで爆発

ホテルなんちゃらこの格好に悪意を感じる

「ジェルシードがホテル・・・なんちゃらに有るって?」

「そつだ。」

「・・・パス」

ジェルシードを回収に俺も収集が掛かる

「良いから行くぞ!」

「イヤだー!」

ズルズル

~~~~でっへりの中~~~~

へりの中に括り付けられている賢一

「兄さん・・・」



「エリオ……」

「ざまあww」

ブチッ

拘束していたバインドを破壊する

「ちょww反則w」

「死ねやあああああ!!」

ゴンッ

「ぶぐらッ!?!」

エリオの頭に垂直に拳を落とす

「」「」あははは……」「」

渴いた笑い声を上げるフォアード陣三人……敵の沈黙を確認

「賢一くん?」

「はい」

なのはに思いつきり睨まれ自分でバインドを駆ける  
と言う器用な真似で元の状態に戻る

「ぶざまっ W W W」

「てめえええ」

気絶していた筈のエリオが此方を向いて嘲笑う  
・・・もう一度バインドを解こうとするが

「け・ん・い・ち君？」

「・・・くっ!?!」

なのはに威圧される

「はっ!?!此れは今までの屈辱を返す時では!?!」

「は・・・?」





「タキシードじゃねえか？ほら俺が着てるだろ？」

「はぁ・・・なるほろ」

くくくそんで持つて着替え中くくく

「悪意を感じる・・・orz」

着替えてみれば何とドレス！！・・・なんで着替えてる途中に

気付かなかったorz

はっ！？まさかコレが宇宙意思か！？

「もう、いいやコレで着替えなおすのめんどいし」

既にケンイチのガラスのハートは砕けていた

「恐ろしいほど似合ってる・・・」

「何か自信なくすかも・・・」

「笑える筈やったンやけど何やこっちのダメージの方が・・・」

何故かショックを受けている三人・・・はやて、やっぱりお前か

「誰だお前」

親友たちよ・・・それはないんじゃないか・・・

ツンツン

「ん？」

後ろを向くとエリオは良い笑顔で親指を上げている

「どう？僕のコーティングしたドレスww」

「てめええええかああああ！！」

犯人はエリオだった・・・ていうかコーティング  
ってコイツ無駄な技術上がってないか



ホテルなんちゃら〜この格好に悪意を感じる〜（後書き）

ふう、すつきり



**警備はあいつ等に任せとこつ(前書き)**

此方も更新・・・もう一度言つといた方がよさそうなので、

この作品は作者の気分転換をするための作品です過度の期待は控え  
ますように

では

警備はあいつ等に任せとこう

エリオをボコボコにした俺は取り合えず外の警備に向うエリオを担いで……

「ケン、お前そのままで行くのか……？」

「ああ、めんどいしな」

「お前……まあ良いならいいけどよ」

良いんだよ、人の目なんてどうでも

「と、考えながらも実話気にしてる兄さんww」

「心を読むんじゃね!!」

突然目を覚まして俺の心を読んだエリオをもう一度寝かせる  
……鈍い音が鳴ったが気にしない方向で

「ねえねえ!!ティア!!」

「何よ、五月蠅いわね」

「あの人見てよ！超美人！！うらやましいなあ」

何故だろうか、俺を指差してる気がする・・・気のせいだよな

「と、現実逃避をする兄・・・ギャピツ!?!」

たくコイツは何でこうピンポイントで眼が覚めるんだ・・・

「はあ・・・」

溜め息をしながらスバル達の方へと足を進める

「ティア！ティア！あの人こっちに来るよ!?!」

「五月蠅いわね!!分かってるわよそんな事」

「あ・・・エリオくん」

「「え・・・」」

キヤロが俺の肩に乗せているエリオに気付く、そしてティアとスバルがジツと此方を見てきて

「「シヨタコン!?!」」

「……何故そうなる。」

「はぁ……俺だ俺」

「「誰……?」」

流石に傷付くぞ俺

「賢一だ」

「ケンイチさん?」

「嘘だ——ww」

「でも、エリオくんが担がれてる理由が分かるかも」

「「……」」

キャラの一言で二人が黙る



「キヤロ、違つよ?」

エリオ、お前……やっぱり良い奴

「男の娘じゃなくて女姿じょしだよWWW」

じゃないよな……ああわかってたさ。だから精一杯のお礼を使  
用じゃないか

「死ね!」

警備はあいつ等に任せとしよう（後書き）

ではでは

はっ！？敵！？（前書き）

いい加減話を進めようと思う……………）ー、ー（キリッ



はっ！？敵！？

取り合えず生ごみを処理した俺は自分の服装は危険だと判断し（主に精神が）着替えに手洗い場に行く

「はあく……？父さんか……適当にするか」

所だった計画が始まったので着替えるのを辞め外に出て【計画通り】進める

「敵だ、俺は先に行く逃した敵は頼んだぞ」

「え！？ちよっケンイチさん！？」

ティアナが叫んでいるがそれを無視してガジェットを倒しに行く

「父さん、聞こえてるか？」

《ああ、聞こえているよ？》

「計画の支障は？」

《無いよ、そのまま計画通りに進めてくれ》

「了解」

《所でケン？》

「何だ？」

《その格好は？》

「策略だ……」

《そうかい、まあちゃんと永久保存したから安心しなさい》

「はっ？」

この男はなんといった？永久保存？何を？女装を？ちよっ

「……」  
《どういうk 《計画に支障が出たら連絡する、頑張ってくれ》……

泣いてないぜ？ああ、別に気にして無いし女装なんて……ああ

「気にしてなんか……っ！無い！！」

一体目のガジェットを計画を無視して破壊する……

「ふう……別に一体ぐらいいいよな？」

そう呟き次のガジェットは破壊せずに倒すだけで留まる

「はあくめんどいな」

くくエリオsideくく

はっ！？此処はどこ？私はだれ？

「エリオくん？だ、大丈夫？」

「え？うん、大丈夫ですますよ？この通り」

キャラが目を覚ました僕に声をかける……にしても今回ののは  
流石にやばかった(汗)

「エリオ、考え中悪いけど手伝ってくれない？」

「え？うはwwなにこの状況ww」

周りにはガジェット、ガジェットの群れ

「ピンチですねww分かりmgハッ!？」

一体の光線が頭に直撃する……それはもう綺麗に

「ちよっ!？エリオ!？」

「はい？呼びました？」

顔は煙でよく見えないが軽い感じで此方に顔？を向けるエリオ

「大丈夫そうね？」

「ええ、此れ位じゃあ死にません(キリッ)」

「ははは、そうみたいね……」

「ええあの女姿しほじのおかげですからwww」

苦笑いを浮かべるティアナを他所にエリオは軽く賢一の口を言いながらヤミミを起動する

「さてと、じゃあ……エリオ無双（笑）始めましょうかあ W W  
W!！」

はっ！？敵！？（後書き）

計画は順調に進行中（前書き）

気分転換で始めたこの小説も32万アクセスまで行くとは驚きで  
いっぱいです。

エロオパワーもといエリオパワーは偉大だな

計画は順調に進行中

「よしと！」

ガジェットを100体ほど倒し終えた時に連絡が来る

《賢一もう良いよ……レリックの確保には成功した後は計画通り倒したガジェットを》

「了解、【転送】」

《ふふふ、相変わらず無茶苦茶だねあれほどの数を一瞬で転送するんだから》

「父さんに言われたくないよ」

転送が終ると同時にホテルアヌグスの方から爆発が起きる

「あれだけのガジェットを躊躇無く爆発させるんだから」

《そうかも知れないね……ふふふ》

まだ計画は始まったばかり



「～エリオ～」

「うはww糞弱いですね」

漆黒の槍を振り回し次々とガジェットを破壊する

「エリオくん！危ない」

背後に近づいていたガジェットをキャロがバインドで身動きを取れなくする

「ありがとう、キャロ！！」

そしてエリオが槍を突き刺し破壊する

「ふ～こんな所兄さんに見られてたら訓練が5・6倍になっちゃうよ」

「あははは・・・」

先程のガジェットが最後の一体だったようでもうこちら辺には敵の気配がしない

「それじゃあティアナさんと合流しようか」

「そうだね」

そして離れていたティアナ達の方向へと足を進める。そこから聞こえたのは罵声と  
右手から血を流している達也さんの姿だった

「ど、如何したんですか!?!」

「いや、ちょっとな」

何も言わずこちらを向いて笑顔で返すだけの達也さん

「お前らは下がれ!! 此処は私達が何とかする!!」

そして何故か怒りの形相をしているヴィータさん

「…………はい」

「あつ！ティアナ！？」

俯いたまま暗い感じのティアナがその場を後にする

「ふはww修羅場ww」

「エリオ君……」

だが自分は自重しない。キャロから白い目で見られながら自分達もティアナさん達を追いかけようとすると同時にホテルアヌグスから大きな爆発が起こる

「なっ！？」

「ちいつこいつ等は囷か！？」

「あ、ガジェットたちが引いていく……」

「また……失敗？」

最初の任務もレリック確保を失敗に終った……今回も失敗で終る？

「あはwそりゃないですよww」

《dark rance》

「消えちまえww」

そして引いていくガジエットの群れに向ってより一層漆黒に燃え  
上がる槍を振りかぶる

その時爆発から少し離れた場所に大きなクレーターが出来た

計画は順調に進行中（後書き）

感想お待ちしています

エリオはご立腹です。(前書き)

更新を結構していないACTです・・・少しずつネタを考えるため此方を中心的に更新

エリオはご立腹です。

「あらら……」

俺がエリオ達の所へ向うと大きなクレーターと暗い表情で立ちすくんでいる機動六課の皆々様が……エリオが落ち込むとは何年振りでしょうか

「兄さん……失敗しちゃいました」

「……」

結構なショックなのかエリオは小さい声で微かに震え俯いたまま言う

「僕は……この仕事、向いてないんでしょうか……」

「はぁ……」

俺がやった事とはいえ、結構来るものがあるな……

俯いたままのエリオの頭に手を置きそのまま荒く撫でる

「ばあか、テメエはまだガキだ失敗だつて幾らでもある、それにお前の覚悟はそんなものか？」

「そんなわけ！・・・」

「なら諦めるな、どんな事があるつと前を向いて行け」

更に激しく頭を撫で言葉を中断させる

「さすれば、願いは叶うであろう・・・なんてなWW？」

「兄さん・・・」

俯いていた顔を上げ顔には暗い表情はもう無く満面の笑みがあった

「臭いですよ。そのセリフ」

ピシッと言う音が聞こえたような気がした・・・

「フフフフ・・・エリオてめえ・・・」

「さすれば願いは叶うであろう」キリッ



あー・・・うん、多分、俺は今顔が赤いだろう・・・これは恥ずかしさのアレじゃない

「KILL!」

「ふひwww」

怒りのあれだ・・・

「つと・・・お前が何時も道理になっても」

他の面々はまだ暗い表情のまま

「アレ?」

よく見ると食らい表情なのはスバルとティアナでキャラ口は何と言  
うかオドオド?

「・・・今思ったがどどういう状況?」

「ふはww分かりませんww」

お前は……

「達也？どついう状況ですか？」

「ははは、まあその内分かって……」

よく見ると達也の手に包帯が巻かれている……ますます理解不能である

「うん……もしかして！仲間を殺しかけちゃったりww？」

「」「」「」「」「」

更に重くなる空気

「あり……？」

「流石ww兄さんww」

取り合えずいつは殴るとして……なんかスイマセン



エリオはご立腹です。(後書き)

こんな感じだったけ？エリオ・・・あれ？

ティアナ&amp;スバルVSなの・・・白い悪・・・魔王！！前編！

「前回までのあらすじ・・・ティアナがスバルに誤射そしてそこへ達也が身代わりに  
そして怒り狂うエリオの最大の一撃・・・迫り来るは白い悪魔、今こっ」

「何を言ってるんだ・・・エリオ」

「凡人には分かりませんよww」

頭か煙を出しているエリオをほって置き、今はヘリの中・・・物凄く重いです。あ、別に女性の体重が重いかさそうつぶべらッ！？

「・・・賢一くん？」

「ずびばぜえ」

くっ流石、魔王ココロを読むとは・・・

「けんいちくん？」

「・・・」

背筋ぴーん！

「分かるよ、おいちゃん、君の気持ち分かるよ〜痛いほど分かるよ〜」

「エリオおじちゃん！」

「……………」

ゴゴゴだろうかそれともズドドドツドだろうか……………そんな音がなのはさんから聞こえる気がするんだ。byエリオ&amp;mp;ケン

……………

「戻って来た……………」

「ですね〜」

へりの中は信じられないほど重かった……………あ、だから女性人の体zyぶべらっ!？

「こりないね兄さんww」

「ふっ……これも男の性なのだよエリオくん」

「どちらかと言うと兄さんの性だよねそれ」

ふっ何を言っている……これは貴様にも言える事なのだ  
よエリオくん

「とっ空気をそれなりに良くしようとしている賢ーだったのだ」w

「w」

「……」

「ふはww無視ww」

「エリオよ……楽しいか？」

「……聞きたいですかww？」

「いや、たぶん同じ気持ちだから良い」

誰も居ない屋上で二人はトボトボと入り口へと向う……皆  
ほって行くなんて酷い！

「ん……?」

「どうしたんですか？兄さん」

「ああ、先に行っててくれ」

「え……これぐらいで」

手で金のマークを作りあいた指で数字を作るエリオ

「良いから行け！」

「へブシっ!？」

エリオを殴り俺は先程目に入ったティアナのところへと向う

「どうした？こんな所で黄昏て」

「ケンイチさん……」

思ったより重症なティアナ……おい、フラグメーカー達は何処へ行った！

「はぁ……そんなに自分の力に自信が無いか？」



「え……?」

うむ、この反応からするとビンゴかな?

「そ、そんな事は……ない……です」

「有るだろう?自分は役に立っているのか、自分だけ足手まといになっているとか、自分は本当に強くなっているのか……他にもたくさん思ったことがあるだろう?」

「それは……」

俯くティアナに更に行く

「それで良いじゃないか」

「っ!良くないです!!分からないでしょうね貴方達みたいな才能に恵まれた人には凡人の事なんて!!」

「ああ、分からないね。弱い奴の考えなんて」

「っ!?!?」

「だけど弱いからこそ強くなれる。目標ができそのLVまで努力をする。弱いからこそ夢が出来る。そして幸せになれる……」

うん柄にも無いことを今日はよく言う日だな

「ケンイチさん……」

「だから今のままで良いじゃないか」

「でも、私はもっと強くなって兄さんの夢を」

「それは今すぐになのか？」

「……」

「だったら急ぐなゆっくり歩くような速さで努力しな」

俯いたままのティアナの頭に手を置き優しくなでる

「そして先ずは周りに認めさせろ、俺はお前を認めてやるよ。夢叶えられると良いな」

そして椅子から立ち上がりティアナに背を向け歩く

「あ、ありがとうございます……お兄ちゃん！」

背を向けたまま手を後ろに向けて振る

「ん？・・・アレ？オニイチャン？アレ？」

フラグメーカーあああああああああああああああああああああああ  
事しろおとおおとおお

心の中でそう叫んだのは俺だけの内緒

ティアナ& amp・スバルVSなの・・・白い悪・・・魔王！！後編！

ケンイチお兄ちゃん事件から数日、今日は模擬戦が行われる

あの後ティアナはなのはに何かを宣言したらしくエリオと毎朝秘密の特訓なるものをしていた。

その間に俺に対してお兄ちゃんと言った事で事件が起きたのだがまあそれは話さなくても良いだろう

「兄さん、どっちが勝つと思いますか？」

「うーん、まあなのはじゃねえの？」

「とは言ってるものの義理妹に勝って欲しい兄さんでしたWWW」

ちよくちよく、こうやってエリオがおちよくって来るが今では成れて無視・・・なんかせずに思い切り拳骨を食らわせている

「それに今日の模擬戦は良い教訓になるだろうよ、教わる方も教える方にもな」

「へえ〜WWW」

「ん？賢一早いな」

「おっ遅かったじゃねえの達也、恭二」

ボロボロに成っている二人が遅れてやってくる

「任務か？」

「まあな……」

「」苦勞なことでww」

それにしてもこの二人が行って怪我をするとわね、どんな任務なんだろうね」

「おっと始まるみたいだぜ」

「w k t k ですねww」

エリオ本当にお前だれに似たんだ……俺か

「二人とも、準備は良い？」

「「はい!!!」」

「それじゃ始めるよ!!!」

合図と共に動く両者

「うはぁ・・・派手だね」

「兄さんほどではないと思うけどねww」

「お前ら二人は黙って見れないのか・・・」

「ふはwwこの程度ww見る必要性ww皆無ww」

「」「」「・・・」「」「」

「エリオ、お前それは無いわ・・・」

「おうwwみんなの視線が」

少し自重したのか真剣に模擬戦に集中するエリオ

「ん？」

「やっぱりこうなったか・・・」

達也がボソッと何かを呟く・・・な事よりスバルが劣りになってど  
うやらなのはを砲撃で倒そうとするみたいだ

「<sup>トレスオン</sup>投影開始」

「おいおい？何で戦闘体制」

「今から起きることを止める為だ」

「????」

目を離している隙になのはがスバルをバインドで動きを封じる・  
・あれえ目が逝ってるんですけど

「んゝ．．．エリオ模擬戦やってみるか？」

「えゝ．．．コワイデス」

「言つと思つたよ．．．」

達也は止めに入るためになのはとティアナの間に行く

「やめろ、なのはこれ以上は危険だ」

「達也くん邪魔しないで」

「た、たつやさん．．．?」

さてと俺も行くのかな・・・

「た・つ・や・くううん？」

「なっケンイチ!？」

腹にドロップキックをお見舞いする

「くっ・・・何をするんだ!」

「だめだめ、まだ模擬戦は終わってないですよ」

「な、なにを!？」

「なあティアナ？」

倒れている体を無理やり立ち上がらせて返事をする

「は、はい!まだ終わってません!!なのはさんに認めてもらうまで  
は終れません」

「なっww達也、戻るぞ?」



「……どつなつてもしらねえぞ?」

「大丈夫大丈夫ww」

達也を担ぎエリオ達のほうへと戻る

「なのはさん！邪魔が入りましたけど、続きを始めましょう」

「……どうしてかなあ私の教え方が悪かったのかな?」

小声で聞こえるシユートと言う声そして無数もの砲撃がティアナを襲う

「ティアアー!?!」

「うるさいわね……耳元で叫ばないでよ」

何時の間にかスバルの横にいるティアナ

「ティアアー!?!」

「どつちつて?」

「幻術ですよ、なのはさん」

スバルの拘束を取り、二人とも距離を置き武器を構える

「ここからが本番です！なのはさん」

「いきます!!」

「「たああああああああああああああ」

「「愛読ありがとうございます……」

「なみの叫びだったんじゃないわ」

「僕も思いましたww」

え？勝負？なのはの勝ちでしたよ？駄目ですな何ですか最後のあの馬鹿でかい砲撃ありえねえでしょ

「でも、とても心が熱くなる戦いでしたねww」

「ああ、どこの青春アニメだって感じたww」



語られる過去！！・・・えゝ興味ないですう

「で今は俺以外の全員が病室でなのは悲しい過去の話をしている  
と」

俺？・・・興味が無いからソーと出てきてコーヒ飲んでます

「ふぁ・・・あゝ暇だなぁ」

《ケンイチ》

「ん？おお、父さん如何したの？」

《久々に此方へ帰ってきてても良いんじゃないかね？》

「はい？」

《いや父さんに会いたくなくて来たとか》

「いや別に・・・」

《チンクも会いたがっているぞ？》

「ん・・・ああ」

《それに見せたいものもあるしな》

「ん〜休暇が取れたら行くわ〜」

「そう言えば何だかんだ言って、家に帰ったのってここに着た時の  
一日だけなんだよな〜」

「はあ・・・帰るかね・・・」

《そうかそうか！ソレは良かった！！》

「うん・・・じゃ」

《ちょっともう少し話っブチ》

「たくあの人はここが敵の拠点だったのを忘れてんのか・・・」

「・・・計画実行まで後少しか」

「あ、いたいた！兄さん何処に行ってたんですか」

「いやあ、ああ言うの嫌いでね俺」

「へえ〜それより今から食事行きましょよ！！」

「ん？もうそんな時間か・・・」

出来ればこのまま平穩が続いて欲しい・・・とも思ってる

「そうですねよ！今日はウルトラスーパーアンリミテッドミートソースを頼むんですよ！」

「等々無限が付いたか・・・」

「ふひwwまだまだwwこんな物じゃないですよww僕の胃袋はww」

「はいはい」

ん？そういえば

「エリオそう言えば、お前なんか局員に写真を売ってたそうだな？」

「え？・・・はて何のことやら？」

「そうそう、例えばこんな物・・・？」

そこには俺が女物の服を着ている写真

「ふはww孔明の罨ww」

「OHANASHIだあああああああああああ」

「ふひひひひwwww戦略的撤退wwやみみ」

《了解》

ヤミミを使って闇に逃げようとするエリオ

「逃がすかぁ嗚呼アアアアアアア」

「ふはwwwオワタww\(^o^)/」

その後エリオを見たものは食事後以外いない





語られる過去！！・・・えゝ興味ないですう（後書き）

今日はこんなものでゝ・・・もうすぐ裏切りが始まりますねえ  
ゝ楽しみですなえゝ

魔法少年フヒヒエリオ〜えww?お呼びでないww? (前書き)

この小説は、エリオ(笑)が好き勝手する物語です。このエリオはエリオじゃないと思う方もしくは嫌いな方は読まないことをオススメします。

エリオー……自重してくれえー

魔法少年フヒヒエリオくえww?お呼びでないww?

西暦20XX年、世界は核の炎につつまれた!!

「ヒヤハッー!!」

だが、人類は死に絶えてはいなかった

「キャッー!?!」

暴力がすべてを支配する世界となった核戦争後の大地、そこで一人の少年の激闘を繰り広げいくのであった!!

「魔法少年フヒヒエリオww始まりますww」

とんでもねえ始まり方だよ……

「エリオくん!!魔法少年に変身だ!!」

「え………だる………ねむ………しんど………じゃ、そつ言

「し事で〜」

「え、ちよっ……」

完

「ストップ！終わってないよー！まだ終われないよー？」

「え……」

喋る黒い生物によってEDがカットされる……ちっあと少し  
だったのに

「え〜……じゃないよ!?!」

「ちっ……はいはい、やりますよやれば良いんでしょ」

さてと……デバイスを持って……

「テクマクマヤコン テクマクマヤコン 範馬勇次「アウトー  
!?!」……なんだよ」

「違うよ!?!それ、確かに変身だけ!?!求めているのと違うよ!?!  
それに何になるうとした!?!」

「……テへww」

「テへwwジャネエー……っ!?!いい加減にシロよ!?!?  
マジで!」

気を取り直して変身魔法を……

「んっんっ……ピリカピリララ ポポリナペ」だから違ううう

ううう!?!?」「

「.....」

「え、何その顔!?!?俺が悪いの!?!?悪くないよね!?!?セットアップ!?!?OK?セットアップ!」

「せつとあつぷう」

「うわゝ殴りてえ.....」

エリオが光につつまれ、バリアジャケットを装着する

「魔法少年、フヒヒWWエリオ参上!?!」

「.....もう良いよ」

ちなみに此処まで掛かった時間は30分である

「月に変わって御仕置きよ!」

「.....」

《ギャアーーーー!?!》

馬鹿でかい犬の化け物が雄叫びを上げる

「ふひwwうるさww」

「エリオ！アイツの弱点は頭に付いてる宝石だよ！そこを」吹き飛ばえええwwww」

手に持たれていた槍で犬の頭を横に思いつきり殴る

《キャインっ！？》

「……………」

「オラオラオラオラオラオラwwww」

その状態を保ったまま槍を使い犬の頭を殴る殴る殴る殴る殴る

「……………」

「止めますww【drak a lance】フヒww」

エリオの手から離れた槍は犬の頭部にあった宝石に突き刺さり小型のブラックホールを作る

「正義は勝つ！（パチンツ）」

「……………」

指がなると同時にブラックホールは犬を飲み込み消えさせる

「ぎゅwwん？」

「…………世界中の魔法使いに謝れ」

追記、黒い謎の生物の名前はケンイチだったりしなかったり…………





魔法少年フヒヒエリオくえww?お呼びでないww? (後書き)

やってしまった感がたっぷりなう

魔法少年フヒヒエリオ〜フヒヒWW呼んだ〜(前書き)

第2弾です。

魔法少年フヒヒエリオ〜フヒヒww呼んだ〜

西暦20XX年、世界は核の炎につつまれた！！

「ヒヤハッー！！」

だが、人類は死に絶えてはいなかった

「キャッー！？」

暴力がすべてを支配する世界となった核戦争後の大地、そこで  
人の少年の激闘を繰り広げいくのであった！！

「魔法少年フヒヒエリオww始まりますww」

この始まり方をデフォにする気か！？

「ねえ〜謎の黒い生物くん」

「ケンイチだ・・・なんだ？」

「この頃不満なんだあ〜」

「何が？」

何時もはつちやけて敵をボコボコにして空気をカオスにして終らせるのに不満があるだと？

「あれだよ〜敵が弱い」

「……………」

「普通さあ〜一般的な所で言うところ言うのって徐々に敵が強くなつていくじゃん？でも何？何時も出てくるのは雑魚ばかり・・・正直言つてえ〜何この糞ゲーって感じ？」

一言言わせて貰おう……………知るかボケ

「それに〜ライバルっライバルも欲しいよね〜こっ少年漫画風なっ？謎の美少女？美少年でも可が欲しいねえ〜」

言わせて貰うがこの前それっぽいのが登場したぞ？ただお前がストラーダで殴りつけて一瞬で出番が終つたが

「元の方は居るのにこっちは居ないって不公平じゃない〜？」

「……………ああ」

……………めんどくせえ

「それにまだあるんだよ？」

まだあるのか……

「何で2話目するの……コレ？意味不明なんですけどぉ〜」

知らん……作者に聞け

「それにそれにい〜原作？ていうか元の僕ってえ〜「うわぁ！！すごいですね、ケンイチさんって（キラキラ）」って感じだけどさぁ〜キモくね？元の俺キモくね？なに好少年きどってんの？って感じなんですけど〜」

お前がキモいわ……

「それに僕がつ」（キラキラ）「ですよ！？もう爆笑モンですよW」

お前の存在が（爆笑）だよ

「でねでねwwやみみと考えただけどww」

「・・・うん」

なんだ・・・すげえ嫌な予感しかしねえ・・・

「原作のエリオと摩り替わろうと思うんだww」

やめるバカ・・・スゲエカオスじゃねえか昨日まで「うわあああ（キラキラキラ）」が「フヒwwワロス」に変わったちまったら物凄いい事になるよ？主に周りの精神が

「駄目かな？」

「だめだ・・・」

「ちっ」

何舌打ちしてんだテメエ当たり前だろうが

「はあ……それじゃ最後の不満」

「なんだ……」

「僕の目の前にいる謎の黒い生物」

……俺か？つまり俺が不満だと言いたいのか？貴様は、俺も不満じゃ！！お前みたいな奴をサポートするなんて！このクソガキ！！

「……」

「……」

……はあ……もういや……っ！？

「エリオくん！！敵だよ！」

「……」

「エリオくん！？」

そこには一通の紙が置いてあるだけでその場に居るはずのエリオ



がない

「なになに？』すいません、もうそろそろ疲れたので元の世界に戻らせていただきますbyエリオ』ってふざけんなああああああああああああああああ！』せめて敵を倒してから行けやくソガキイイイイイイイイイイイ」

魔法少年フヒヒエリオフヒヒWW呼んだ〜(後書き)

これで終わりです・・・たぶん

フォワードは 休日 ……俺は ……?

「な、何だと!？」

「ふひwwざまあww」

今起こったことを有りのまま話すぜ、俺は休みじゃないらしい  
な…何を言ってるのかわからねーと思うがおれも何を言われ  
たのかさっぱりわからなかった…

頭がどうにかなりそうだったぜ…OHANASHIだとかス  
ターライトだとかそんなチャチなもんじゃあ(いやチャチでもない  
が) 断じてねえ もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「う…うそですよね…?」

「……………(ニ)」

「……………」

あはっwいい笑顔ですね!!……………ふう……………  
もう良いよね?

「ねえ、今どんな気持ちww?休みをもらえなくてどんな気持ちw  
?」

「……………ふう」

とりあえず……………ゴールする前にエリオを撲殺しとこうか

「あれ？ちょｗｗ何つけてるんですか!？」

「……………え？メリケンサック？」

「ふはｗｗやられる!？」

ふうふう……………BOOK SATU

「はいはい、ケンイチ君仕事しようねえ？」

「え、ちよっ？HANASEE!？」

なのはに首根っこを捕まれそのまま連行される。そして言い笑顔でハンカチを片手に見送るエリオ

「フオオオオオオオオオオオオオオ!？」

「うるさいよ……………」

「すみません」

張り切って残業だあ . . . . . うううそう言えば達也たちは？

「お休みだよ？」

「. . . . .」

い . . . . . 今起こったことを有りのまま話すぜ (ry

「え、じゃ . . . . . じゃあなのは達は . . . . .」

「え、もちろん仕事」

だよね!! そうだよね!! まさか俺だけ残業する分けないよね!!

「って言いたいところなんだけど、皆に怒られちゃって休みになったの」

「. . . . .」

い . . . . . 今起こったことを有りのまま (ry

「フェイトは!?!」

「先に達也君たちと出かけてるよ?」

.....

「.....はやては?」

「仕事だよ?」

な、なんだ.....おれ一人じゃなかった

「まあ本局にだけど.....」

い.....今起こった(r y

「.....」

「じゃ、六課の方よろしくね?ケンイチ君」

そのまま何処かへ行ってしまふのは.....

「お、如何したんだ？ケンイチ」

「ヴァ・・・ヴァイス先輩!!」

一人で寂しく残業じゃない!!味方が・・・味方がいたぞ!!

「って・・・その花束は？」

「あはは、ちょっと妹にな・・・」

「え・・・」

そ、そんな・・・

「あ、何だ？俺に妹が居たら駄目か？」

「え、いや・・・もしかして」

「ん？」

ま、まさか・・・

「休み？」

「ん．．．ああ、有休って奴だ」

「．．．．．」

「ど．．．．．どうした？」

「．．．．．いや．．．．．別に．．．．．」

「そ、そうか？なら良いんだが．．．まあ行って来るわ！」

「ああ．．．．．いってらしゃい．．．．．」

そのままヴァイスは外に待たせてたであろうタクシーに乗り、妹の所に行ってしまった

「．．．．．」

フフフフ．．．．．こういう状況なんて言うんだっけ？．．．．．  
そう、あれだ

ぼっちなう．．．．．うっ



目から汗が  
・  
・  
・

フワードは 休日 . . . . 俺は . . . . ? (後書き)

悲しき運命かな . . . . .

俺は ぼっち . . . . . っ . . . . .

カタカタカタ . . . . . 室内に響き渡る音は俺の今の心境を印して  
るように低く鳴り響く

「 . . . . . 」

カタカタカタ

「 . . . . . 」

カタカタカタ

「 . . . . . 」

カタカタ (ry

「 . . . . . 」

カ (ry

「何で俺だけ残業なんじゃあああああああああああああああああああああああああ  
ああああああ!!」

イライラが爆発した……数時間黙って仕事をしていたから許して欲しい

「此処を火の海に変えちやるぞおおお我えええええええええ!!」

とつまあ……誰も居ないから答えは帰ってくるわけも無く

「……涙が出ちゃう」

ああ……本当、何で俺だけ仕事があるの？休みじゃないの？え？はやては仕事？アイツは隊長だ……仕方ない……なんになんで俺仕事？何で知り合い全部休日？なに？死ぬの？

「て言うか俺が死ぬる……寂しくて死んじゃう」

《ケンイチ》

「ん……父さん？どつたの……？」

《問題が発生した》

．．．．問題？俺の今の状況より？このぼっち状態より？．．．．

「．．．．」

《どうかしたのかい？》

「．．．．なんでもない．．．．で？問題ってのは？」

《聖王が脱走したレリックを持って》

．．．．うわあ．．．．何それ．．．．めんどくさい

「で？ソレを俺が？」

《ああ、今ナンバーズが捕獲に向って．．．《こちら、エリオ・モ  
ンディアル、六歳ぐらいの子供がレリックを持って倒れてるところ  
を発見しました！！》》

「今、連絡が入ったどうやら六課が見つけたみたいだぞ？」

《どうやら、そのようだね．．．》

「で？俺は動いた方が良いか？それとも待機か？」

《君には保険としてまだそっちに就いて貰おうか》

「了解」

うーん大きく物語が動いてきたねえ〜・・・さてどうなることやら

「……………まあとりあえず出勤しますかねえ〜」

《ケンイチ！お前も此方へ出勤してくれ！！》

「今行こうとしたところだよ〜」

達也たちも行くのか、これはレリックと聖王確保は無理かもね父  
さん

「座標確認……………【闇よ】」

うーん、何か久々に能力使った感じだわあ〜

「兄さん！」

「ん？よう、どうだ少女の様子は」

「それがまだ眠ってて」

「この子が聖王ね……ふむ」

「はっ兄さんもしかして口……」

「ちげえよ……キャ口も距離を空けるな！」

「さーせんwww」

「コイツは……何処で育て方を間違えたのか……まあ最初からだろうな……」

「皆！」

「あ、なのはさん達だ」

「ティアナにスバルも一緒か……て言うかはやて以外全員集合？」

「とりあえずその子をへりに」

「と言うか……俺如何しようか……このまま此処でボ

「っとしてたら駄目かな？」

「ケンイチ君！！何してるの！！敵だよ！！？」

「え．．．？」

あれ？フォアード達は？地下？え、何時の間に．．．良いから早くガジェットを倒すのを手伝え？

「了解です」

時がたつのは早いなあ．．．．やはりボーツするのは駄目だそうですね

「ケンイチ、俺は地下にいるフォアードを追いかける上空にいる敵は任せた」

「ええ．．．．」

「ふむ、なら地上にいる敵は俺が相手しようかな．．．」

何勝手に話し進めてるんですかあゝ二人とも．．．



「はあ……まあやる事ねえし良いか」

「トレスオン投影開始……任せたぞ！」

「バレットオープン弾丸複製……さて暴れるか」

やる気満々ですなあ〜二人とも

「平凡が一番なのになあ〜」

2刀のキープレードを呼び出し構える

「魔眼は【直死の魔眼】切れ味抜群だぜえww」

さてと……仲間ゴッコを始めようか!!

撲殺、滅殺、惨殺、刺殺・・・まあ破壊ですけどね(前書き)

今気付いたんだが・・・「死を忘れた少年」のちよこちよこ書  
いていた2話も消えている・・・!? 当たり前か・・・泣きたくな  
るぜ・・・更新です。

撲殺、滅殺、惨殺、刺殺……まあ破壊ですけどね

「ひとつ振りかぶれば」

ドーンっと言う音と共に近くにいるガジェットを破壊する

「ふたつ振りかぶれば」

2回目の振りで周りにいた6機ほどのガジェットが風圧で飛ばされる

「みつ振りかぶれば」

3回目の振りで斬撃が飛び半径50mの敵が粉々に切り刻まれる

「よっつ振りかぶれば」

4回目の振りでキーブレードに溜めてあった魔力が発散され魔法が発動する【グラビデ】

「いつ〜っ振りかぶれば」

5回目の振りで引力に吸いよせられたガジェットが粉々に砕け散る

「む〜っ振りかぶれば……………」

6回目……………ってもう良いよ!! すごい作業じゃねえか!!  
めんどくせえよ!!

「デイベインバスターー!!」

えげつねえ……………流石魔王!! そこに痺れる! 憧れるうう  
う!!

ジュツ……………じゅっ?……………あるえ? 砲撃が掠めたよ?

「何かいった……………」

「イエ、ナニモイツテマセン」

目が逝ってるよ!?!……………思考にも気をつけないと俺がやられる

「黙って作業にもどろ．．．え〜と何回目だっけ？」

とりあえず振りかぶってガジェットを破壊

「ん？」

おやおや、何と言う事でしょう。ナンバーズがへりを狙ってるではありませんか．．．どうしようか？

?そのまま観察

?へりをかばってチュドーン

?なのはさんに報告

?いつそのこと俺がへりを破壊

?発狂

?と?は意味不明で却下．．．?はそれをするなら自分で助けるで却下．．．?は痛いから却下?の観察で!!

「まあ恭二が気付いてるみたいだから良いけどね」

そっだ、ちゃんとナンバーズに回避するように言わなきゃね

「うっとうお！？でかい虫が！？」

やめてえ！？もう地面のライフは0よ！？

「とう言つか何か蚊帳の外な様な気がするんだが大丈夫か？」

大丈夫だ問題ない……………うん、フラグだね。完璧に蚊帳の外だねww

「あ、恭二が狙い定めた……………」

ナンバーズに報告するの忘れてた……………テヘペろ、ご愁傷様です

「一樣、遅いと思うけど《回避しないとやばいぞお》《

念話を送った瞬間と同時に恭二から砲撃が行われる

「合掌……………」

それでも僕は悪くない

「あ、回避した……い」

え？別に落胆してないよ？舌打ち？してないしてないww

「うん……どうやらお勤め終了ですかな？」

ガジェット達が退散してるようだし

「ふう……それじゃ私目は先に帰らせてもらいますかね……」

どうせ俺は……仕事がありますよ……だ

撲殺、滅殺、惨殺、刺殺・・・まあ破壊ですけどね(後書き)



フヒヒww.....え?タレだろっねww?(前書き)

更新なう

フヒヒｗｗ．．．．え？ダレだろうねｗｗ？

「お仕事お仕事〜ふふふ〜ん」

どうも．．．．聖王脱走事件から何日か経った今頃．．．．私は

「お仕事、楽しいなあ〜」

私．．．．いや俺は！！

「なのはさん、早く終わったんで何か手伝いますよあ〜」

お、俺は！！

「え．．．あ．．．うん．．．よろしく．．．ね？」

「はい！任せてくださいい〜」

俺、風間賢一は！！

「に、兄さんが壊れた……!？」

「ケンイチ……お前……ウツ」

「お兄ちゃんっ……」

「ケンイチ君……」

「ケンイチさん……」

「ちょっと……やり過ぎちゃったかな……」

俺は仕事が!!

「あはは、どうしたんだい、皆々? 張り切ってお仕事だよ」

「」「」「」「」「」「」「」「」

仕事楽しくて溜まりませ〜ん

「お仕事、お仕事」

「ある意味……なのはより性質が悪いな……」

「何だろっ、背筋が……っ」

「こゝ、こんなの！…兄さんじゃなああああああああああ  
ああい」

皆が何か言ってるけど気にしないぞ〜 さあ〜今日も残業 残業

「あははは〜」

「はっ！?」

何だろっ、物凄く恐ろしい夢を見ていた気がする……俺のは  
ずなのに俺じゃないみたいな……

「ん……?」

「《あははは》 お仕事楽し》……………あ……………っ  
「

目と目が合うその瞬間に

「エリオ? ナニヲしているのかな?」

「アハハハ……………アデュー」

物凄いスピードで先程まで俺の耳元で何か呟いていたエリオはそ  
の場から逃げ出す

「何か知らんが……………怒りがフツフツと沸いて来るぞ……………ク  
クク」

さあ……………エリオ、リアル鬼ごっこの準備は万全だな?

「待てゴリアあああああああ!」

「待てと言われてww待つ奴がいます……………ちょww速っ!」

フハハハは我から逃げようなんぞ、数億年速いわああああ！！

「くっこうなったら！」

「フフフ、何だ、戦闘で逃げ切るつもりかああ？」

ストラダーを構え重心を前に付け構えるエリオ

「狙うは前方の女顔！！」

「ピキツ……」

フフフフ……キILL！

「決めるは一撃<sup>いちげきひつそつ</sup>避走の攻撃！！」

「キャハハハッ」

エリオの顔面まで後15m……盛大にぶち飛ばせてくれる！！

「うおおおおお！！」

「回避<sup>かい</sup>じゃはやひりさよよさ、はだあだぐぐあい！！」

言語と言つ言語を喋れていないケンイチがエリオの顔面を捉える

「必殺つ！【白い悪魔光臨】！！・・・あ、なのはさんですか？」

「ふひゃ・・・は？」

え、ちょ・・・え！？

「隙有りiiiiiiiiiiiiiiii【ダークランス改（賢一専用）】

「ぬぁiiiiiiiiiiiiiiii!？」

投げ出された槍は黒い瘴気を撒き散らしそのまま賢一を巻き込み  
ある場所へと一気に突き進む

「・・・フヒヒヒWW勝利WWなうWW」

エリオが勝利に浸っていたのはその場だけの内緒

「く、あの野郎・・・っ!?!」

「……………(「「「「」」」」」」

槍によって吹き飛ばされた賢一はエリオを追いかけようとするが背後による殺気によって思わずその場に立ち止まる……………この殺気は!?

「ケンイチくん?」

「えっと……………あの……………コレは……………エリオがですね……………」

「ああ?」

「いえ、あの……………すいません」

そこに居たのは魔王まんのう、もっとも恐ろしい存在である……………

「それじゃ、OHANASHI……………しようか?」

「はい……………」

アハハハハー……………エリオめえ、覚えてるよおー……………

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」



「フヒヒww完全勝利」

これがエリオの初の勝ち星である

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6782m/>

---

魔法少女リリカルなのは～3人の転生者、平凡だ～

2011年10月6日01時22分発行